

314
363



始



陸軍歩兵大佐竹本竹治郎著



河川之戰鬪

全

大正
5. 2. 9
内交

東京 軍需商會發行



陸軍歩兵大佐竹本竹治郎著

東京 軍需商會發行

緒言

- 一、本書は主として河川の戦闘を敘述したるものにして之を前後二編に分ち前編には純然たる河川の攻撃戦闘を構成し、後編には防禦の原則を、徒渉し得べき河川に應用して其の戦闘動作を研究せり、然れども所説或は正鵠を失したる所なきを保せず、又種々の動作中或は自然を害する所無き能はざるべし、要するに研究すべき順序を指示するを主眼とし徒らに大言壯語を弄して快とするものにあらざるなり。
- 二、情況の記述或は冗長の嫌無きにあらざるべし然れども此内自ら軍隊の行動に關する各種の原則並下級指揮官の責任等を散見することを得べし畢竟諸種問題の答解と相待て軍隊統帥法を十分に研究せむと欲するに外ならざるなり。
- 三、前編及後編の爲に左記の二萬分一地圖を要す。

所要地圖

○前編ノ爲ニ要スル地圖

(圖形地一分萬二)

	方志	野小
根會	砂高	木三
		町保久大
		石明

○後編ノ爲ニ要スル地圖

(圖製假一分萬二)

村瀨生	村田池	村木茨	方枚
町宮西	町丹伊		
村津今	崎尼		

河川之戰鬪前編目次

想定

問題 此夜ニ於ケル旅團長ノ決心

右答解に就ての詳説

決心を定むることに就て

敵狀に就ての考察

任務遂行の手段に就て

行進目標の選擇に就て

行進の區處に就て

決心、理由、處置

問題 旅團長ノ降スヘキ翌日ノ爲ノ命令

右答解に就ての詳説

軍隊區分及進路の選定に就て

前編目次

出發時刻に就て

出發の爲の諸隊の集合に就て

大行李の集合に就て

命令の記述に就て

騎兵の使用に就て

軍隊區分及混成第一旅團命令

三月二日及三日朝に於ける騎兵隊の

情況

問題 此時ニ於テ騎兵隊長ハ如何ニ處

置スルヤ

答解

答解に就ての説明

騎兵隊長の處置

情況

問題 騎兵隊宿營配置

右答解に就ての詳説……………五五
 遠地搜索に任せし騎兵隊の宿營に關する意義に就て……………五五
 前哨及宿營配置に就て……………五五
 警戒線及本隊の宿營地に就て……………五五
 警戒部署に就て……………五五
 騎兵隊の前哨及宿營配置……………五五
 情況……………五五
 問題 騎兵隊長ノ降スヘキ翌日ノ爲ノ命令……………五五
 右答解に就ての詳説……………五五
 命令下達に就て……………五五
 分離して宿營せる部隊への命令下達に就て……………五五
 騎兵隊命令……………五五
 情況……………五五

問題 騎兵隊長ノ任務履行ニ關シテ爲スヘキ區處(第五中隊ヲ除ク)……………八一
 右答解に就ての詳説……………八一
 騎兵隊長の決心に就て……………八一
 進路の選定に就て……………八一
 山陽道に對する處置に就て……………八一
 前進に於ける警戒部署に就て……………八一
 騎兵隊長の爲すべき區處……………八一
 情況……………八一
 問題 第五中隊長ハ如何ニ其前進ヲ區處スルヤ……………九一
 答解……………九一
 答解に就ての説明……………九一
 第五中隊の前進區處……………九一
 三月三日以後に於ける諸隊の情況……………九一

問題 此時ニ於ケル旅團長ノ情況判斷……………九七
 右答解に就ての詳説……………九七
 敵狀に就ての考察……………九七
 旅團の取るべき處置に就て……………九七
 判決、理由、處置……………九七
 情況……………九七
 問題 前衛司令官ハ旅團長ノ命令ニ基キ如何ニ其隊ヲ部署スルヤ……………一〇九
 答解……………一〇九
 進路に就ての研究……………一〇九
 第一線に配置すべき兵力に就て……………一〇九
 旅團長の命令に基く前衛の部署……………一〇九
 情況……………一〇九
 問題 工兵中隊長ハ如何ニシテ河川ノ偵察ヲ實行セントスルヤ……………一二三
 前編 目次……………一二三

答解……………一二三
 答解に就ての説明……………一二三
 偵察に就ての部署……………一二三
 情況……………一二三
 問題 午後二時ニ於ケル旅團長ノ決心……………一三〇
 右答解に就ての詳説……………一三〇
 敵狀に就ての考察……………一三〇
 渡河に關する區處に就ての研究……………一三〇
 旅團長の決心……………一三〇
 問題 右ノ決心ヲ實行スル爲ノ渡河計畫……………一四一
 右答解に就ての詳説……………一四一
 架橋點に就ての研究……………一四一
 架橋材料の選定に就て……………一四一
 應用材料を以てする架橋に就て……………一四一

鐵道橋に歩兵を通過し得る設備に就て……………一四九
 架橋作業開始時刻に就て……………一五〇
 掩護隊の渡河に就て……………一五三
 架橋掩護陣地と渡河掩護陣地とに就て……………一五三
 混成第一旅團渡河計畫……………一五五
 情況……………一五八
 問題 城山方面ニ於ケル掩護隊長ハ現
 在ノ情況ニ際シテ渡河開始ニ先タ
 チ何事カ處置スル所アルヤ……………一六二
 答解……………一六二
 答解に就ての説明並處置……………一六六
 城山方面の情況……………一六九
 中津方面の情況……………一七五
 問題 掩護隊長ハ右ノ情況ニ對シ何事

カ處置スル所アルヤ……………一六六
 答解……………一六六
 答解に就ての説明……………一六八
 掩護隊長の爲すべき處置……………一六八
 情況……………一六九
 問題 第六中隊長ノ決心……………一七〇
 答解……………一七一
 答解に就ての説明並中隊長の決心……………一七一
 情況……………一七三
 鐵道橋附近の情況……………一七三
 城山方面の情況……………一七四
 問題 此時ニ於ケル大隊長ノ決心……………一七六
 答解……………一七六
 答解に就ての説明……………一七六

大隊長の決心及處置……………一七七
 情況……………一七六
 問題 此時ニ於ケル大隊長ノ決心……………一八二
 答解……………一八二
 答解に就ての説明並大隊長の決心……………一八二
 情況……………一八三
 中津方面の情況……………一八三
 問題 大隊長ハ現在セル部隊ヲ如何ニ
 配置スルヤ……………一八四
 答解……………一八四
 答解に就ての説明……………一八四
 部隊の配置……………一八五
 情況……………一八六
 鐵道橋方面の情況……………一八六

城山方面の情況……………一八九
 中津及鐵道橋方面の情況……………一八九
 問題 此時ニ於ケル第一大隊長ノ決心……………一九三
 答解……………一九三
 答解に就ての説明……………一九三
 大隊長の決心……………一九四
 情況……………一九四
 問題 此時ニ於ケル掩護隊長ノ決心……………一九六
 答解……………一九六
 答解に就ての説明……………一九六
 掩護隊長の決心……………一九八
 情況……………一九九
 城山方面の情況……………一九九
 中津及鐵道橋方面の情況……………二〇〇

城山方面の情況 二〇三

問題 此際右翼隊長ハ特ニ處置スルコトアルヤ 二〇三

答解 二〇四

答解に就ての説明並掩護隊長の處置 二〇四

情況 二〇五

問題 此時ニ於ケル掩護隊長ノ決心 二〇六

答解 二〇六

答解に就ての説明並掩護隊長の決心 二〇七

情況 二〇八

問題 此時ニ於ケル右翼隊長ノ決心 二二二

答解 二二二

答解に就ての説明 二二二

右翼隊長の決心及處置 二二二

情況 二二三

中津方面の情況 二二六

問題 此時ニ於ケル旅團長ノ處置 二二六

答解 二二六

答解に就ての説明 二二七

旅團長の處置 二二八

情況 二二九

問題 此時ニ於ケル歩兵第一聯隊第二大隊長ノ決心 二三二

答解 二三二

答解に就ての説明 二三二

大隊長の決心 二三三

情況 二三三

問題 歩兵第一聯隊第二大隊の前進區處 二三六

答解 二二六

答解に就ての説明並前進區處 二二六

情況 二二七

問題 此際旅團長ハ處置スルコトアルヤ 二二七

答解 二二七

答解に就ての説明 二二八

城山方面の情況 二二九

問題 此際ニ於ケル右翼隊長ノ決心 二二九

答解 二二九

答解に就ての説明 二三〇

右翼隊長の決心 二三〇

情況 二三〇

問題 右翼隊長ハ其主力ヲ西山方面ノ

地區ヨリ前進セシムル爲如何ニ其隊ヲ區處スルヤ 二二七

答解 二二七

答解に就ての説明並區處 二二八

情況 二二九

問題 此時ニ於ケル第一大隊長ノ決心 二二九

答解 二二九

答解に就ての説明 二二九

第一大隊長の決心 二二九

情況 二二九

中津方面の情況 二二九

問題 此時ニ於ケル旅團長ノ決心 二二九

右答解に就ての詳説 二二九

敵狀に就ての考察 二二九

河川之戰鬪後編目次

主力を使用すべき方面に就ての考究……………二四六
 攻撃の爲の準備配置に就て……………二四九
 旅團長の決心及處置……………二五一
 情況……………二五三
 問題 此際ニ於テ旅團長ハ特ニ處置ス
 ルコトアルヤ……………二五三
 答解……………二五三
 答解に就ての説明……………二五四
 旅團長の特に爲すべき處置……………二五六
 情況……………二五六
 右翼隊の情況……………二六〇
 左翼隊の情況……………二六三
 附記……………二六六

想定……………二七三
 問題 前進ノ爲ノ支隊命令……………二七四
 右答解に就ての詳説……………二七五
 行進目標の選定に就て……………二七五
 行進區處に就て……………二七七
 軍隊區分及支隊命令……………二七九
 情況……………二八三
 問題 此時ニ於ケル支隊長ノ決心……………二八五
 右答解に就ての詳説……………二八五
 彼我情況の觀察……………二八五
 猪名川河孟に於ける一般の地形判斷……………二八六
 任務遂行の爲の手段に就て……………二八八
 戰鬪準備を整ふべき地點に就て……………二九一

決心、理由、處置……………二九三
 情況……………二九六
 問題 此時ニ於ケル支隊長ノ情況判斷……………三〇三
 右答解に就ての詳説……………三〇三
 敵狀に於ての考察……………三〇三
 敵の主力の來るべき方面に就ての研究……………三〇九
 好機に乗じて攻撃し得る爲の位置に就て……………三一
 判決、理由、處置……………三三三
 情況……………三三七
 問題 歩兵第一聯隊長及第二聯隊長ノ
 前進區處……………三三七
 答解……………三三八
 答解に就ての説明……………三三八
 歩兵第一聯隊長の率ゆる部隊の前進區處……………三三〇

歩兵第二聯隊の前進區處……………三三一
 情況……………三三一
 問題 支隊ノ夜ヲ撤スル爲ノ配置……………三三四
 右答解に就ての詳説……………三三四
 敵狀に就ての考察……………三三四
 渡河點の守備に就て……………三三六
 諸隊の配置……………三三八
 情況……………三三〇
 問題 歩兵第一聯隊第一大隊長ハ如何
 ニ其隊ヲ配置スルヤ……………三三二
 答解……………三三二
 答解に就ての説明……………三三二
 諸隊の配置……………三三三
 問題 歩兵第二聯隊第一大隊長ハ如何

ニ其隊ヲ配置スルヤ	三三三
答解	三三四
答解に就ての説明	三三四
諸隊の配置	三三五
情況	三三六
問題 歩兵第二聯隊第一大隊長ハ右ノ	
情況ニ對シ何事カ處置スルコトアルヤ	三三九
答解	三四〇
答解に就ての説明	三四〇
大隊長の處置	三四一
情況	三四二
問題 歩兵第一聯隊第一大隊長ハ右ノ	
情況ニ對シテ何事カ處置スルヤ	三四四

答解に就ての説明及答解	三四四
情況	三四四
問題 支隊長ハ右ノ情況ヲ如何ニ判斷	
シ如何ニ處置スルヤ	三四八
右答解に就ての詳説	三四八
敵狀に就ての考察	三四八
支隊の取るべき處置に就て	三四四
判決及處置	三五五
情況	三五七
問題 支隊長ハ之ニ對シ何カ處置スル	
コトアルヤ	三五七
答解	三五八
答解に就ての説明	三五八
情況	三五九

問題 野砲兵大隊長ハ支隊長ノ命令ニ	
基キ如何ニ陣地ヲ選定スルヤ	三六一
答解	三六一
答解に就ての説明	三六一
陣地の選定	三六二
情況	三六二
問題 第一線の中隊長ハ如何ニスルヤ	三六四
答解	三六四
答解に就ての説明並第一線中隊長の處置	三六四
情況	三六五
問題 支隊長ハ右ノ情況ニ由リ何事カ	
處置スルヤ	三六七
答解	三六七
答解に就ての説明	三六七

支隊長の處置	三六八
情況	三六九
問題 此時ニ於ケル支隊長ノ決心	三七二
右答解に就ての詳説	三七二
支隊長の終始一貫したる意志に就て	三七三
現在の情況に就ての觀察	三七四
支隊長の決心及處置	三七六
情況	三七六
問題 此時ニ於ケル歩兵第一聯隊長ノ	
決心	三八二
答解	三八二
答解に就ての説明	三八二
聯隊長の決心	三八四
情況	三八四

川面村方面の情況……………三九四

問題 騎兵中隊長ハ如何ニスルヤ……………三九六

答解……………三九六

答解に就ての説明並中隊長の處置……………三九六

情況……………三九八

問題 右ノ情況ニヨリ騎兵中隊長ハ差
當リ處置スルコトアルヤ……………三九八

答解……………三九八

答解に就ての説明並中隊長の處置……………三九八

情況……………三九〇

問題 此時ニ於ケル騎兵中隊長ノ決心……………三九〇

答解……………三九一

答解に就ての説明……………三九一

中隊長の決心……………三九三

情況……………三九五

問題 騎兵中隊長ハ差當リ何事カ爲ス
ヘキコトアルヤ……………三九五

答解……………三九五

答解に就ての説明並中隊長の處置……………三九五

山崎街道方面の情況……………三九六

守部村方面の情況……………三九七

問題 此時ニ於ケル歩兵第二聯隊第一
大隊長ノ決心……………三九七

答解……………三九七

答解に就ての説明……………三九七

情況……………三九〇

山崎街道以北の情況……………三九〇

問題 支隊長ハ今ヨリ何事ヲ爲サント……………三九〇

スルヤ……………四〇六

右答解に就ての詳説……………四〇六

彼我の情況に就て……………四〇七

追撃隊の編成に就て……………四〇九

支隊長の處置……………四一〇

情況……………四一〇

問題 追撃隊攻撃の爲の區處……………四一一

答解……………四一二

答解に就ての説明……………四一二

攻撃の爲の區處……………四一四

情況……………四一五

問題 追撃隊長ハ今後如何ニ其前進ヲ
區處スルヤ……………四一六

答解……………四一六

目次終……………

後編目次……………

答解に就ての説明……………四一六

前進の區處……………四一八

情況……………四一八

問題 此時ニ於ケル支隊長ノ決心……………四二一

右答解に就ての詳説……………四二一

彼我情況に就ての考察……………四二二

我行動に就ての研究……………四二二

行進目標に就ての研究……………四二五

支隊長の決心及處置……………四二六

情況……………四二七

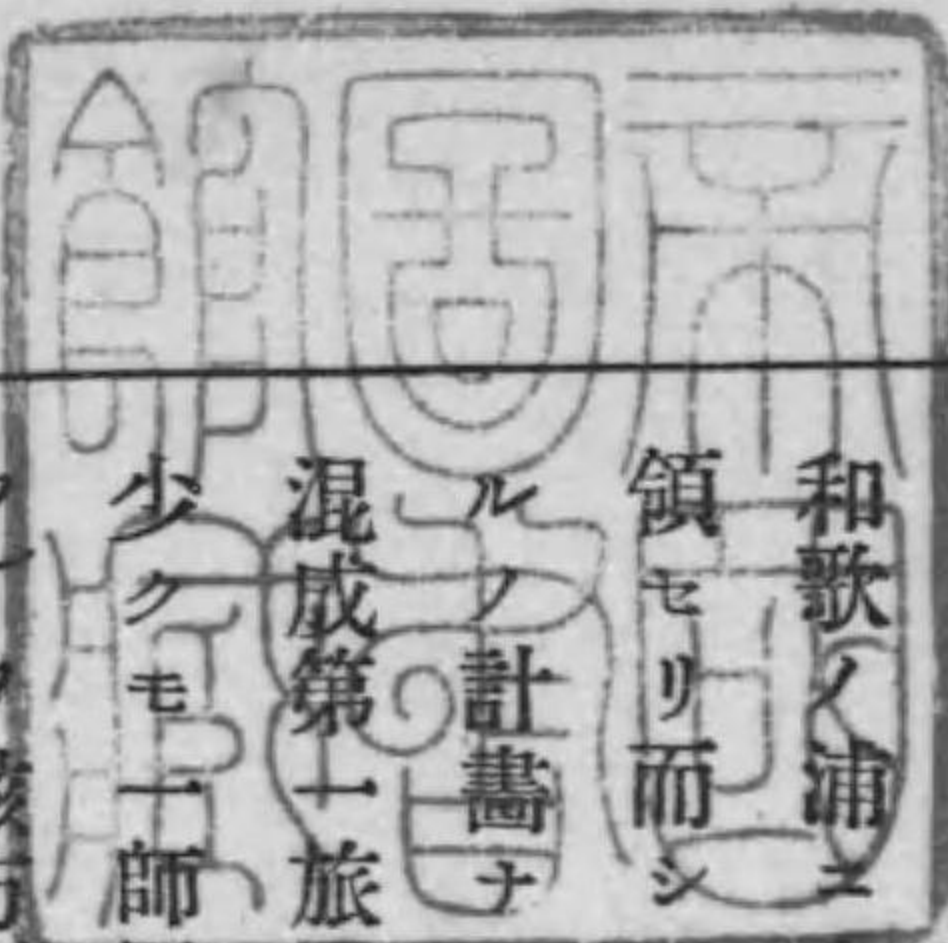


河川之戰闘 前編

想定

所要地圖

二萬分一地形圖
小野、三木、大久保町
明石、志方、高砂、曾根



和歌浦^上陸セル軍ノ主力ハ微弱ナル敵ヲ驅逐シテ三月一日大阪ヲ占領セリ而シテ四日京都平野ニ堅固ナル陣地ヲ占領セル敵ニ對シテ前進スルノ計畫ナリ

混成第一旅團ハ姫路方面ヨリ軍ノ主力ニ向ヒ動作セントスル敵 (其兵力少クモ一師團ニシテ兩二日前ヨリ山陽鐵道ニテ姫路ニ輸送中ナリト云フ)ヲ該方面ニ抑留シ軍ノ背後ヲ安全ナラシムヘキ任務ヲ以テ神戸ニ上陸シ二日戰鬪部隊(騎兵聯隊ヲ除ク)ヲ以テ明石町ニ、輜重ヲ以テ鹽屋、西須磨間ニ宿營セリ

此日午後七時三十分マテニ旅團長ノ知り得タル情況左ノ如シ

一、敵ノ僅少ナル歩兵部隊ハ本日午後四時頃國包、加古川町及高砂ヲ占領セリ

二、室山(國包北方)ヨリ上流野村間ニハ未タ敵ヲ見ス

三、騎兵聯隊ハ敵ノ騎兵ヲ壓迫シ主力ヲ以テ清水新田附近ニ、一部ヲ以テ練部屋附近ニ宿營セリ

混成第一旅團ノ編組左ノ如シ

旅團長 陸軍少將某

歩兵第一聯隊

歩兵第二聯隊

後備歩兵第三聯隊

騎兵第一聯隊

野砲兵大隊

山砲兵中隊

工兵中隊

電話隊

衛生隊

架橋縱列

第一、第二野戰病院

歩兵彈藥一縱列

砲兵彈藥一縱列

第一、第二糧食縱列

注意 後備歩兵第三聯隊ノ編制ハ他ノ聯隊ト同シク、騎兵聯隊ハ五中隊ニシテ四銃ヨリ成ル機關銃一隊及通信班一個ヲ有ス

問題

此夜ニ於ケル旅團長ノ決心

四

右答解に就ての詳説

指揮官の決心を定むるには、先づ以て自己の任務を喚び起さねばならぬ。實に任務は決心を定むるに、第一の準據を與へるものである。任務を度外視した決心は毫も價值無きものである。勿論敵狀や地形は、我任務の遂行上に影響を與へらるるものであるに相違無い。蓋任務の遂行と云ふ事が取りも直さず敵の上に働くのであつて、敵と云ふ目當てがなかつたならば、或る特種の場合には之を措き他は殆ど無意味に歸するのである。であるから敵と云ふ事は固より終始離るべからざることである。既に敵と云ふ事が終始離れないのであるから、地形も亦自然に加はつて來るの

決心を定
むること
に就て

である。從來から唱道する所の敵狀、地形、任務の三つのものを考究して決心を定むるのであると謂ひしは、蓋是に外ならないのであらう。然しながら敵狀、地形は決心を定むる爲の基礎では無い。決心を實行する動作の上に働きを爲すものである。若しも敵狀を基礎として決心を定めやうとしたならば、多くの場合に於て時機を失するのである。何ぜならば敵狀は殆ど常に不明であるから其の明確となるのを待たねばならんからである。然るに其の明確に分るのは既に我面前に近く接したる時である。此に至つて我動作を決定しても、敵の行動に従屬せしめられて、餘儀無く受働の位置に立たねばならぬやうになるのである。是全く故らに先制の利益を放棄して自ら苦境に陥るものと謂はねばならぬ。されば當初得たる敵狀に由り其の行動を揣摩憶測して、之を基礎とし之に對して我動作を決せんか、或は敵の行動に従屬せしめられるやうな事は免るる

であらう。けれども我憶測した通り敵が行動しなかつたなら、而かも其の行動が最も我れに不利を來すのであつたなら、是亦收拾すべからざる状態に歸するのである。それであるから敵状を基礎として決心を定めてはならん。何れの場合、何れの時機でも任務を基礎とせねばならん。又敵の兵力に就ても容易に知れるもので無い。是れが知れるのは戦闘の後である。それであるから敵の兵力を云爲して我動作を決せんとするが如きは、多くの場合に於て排斥すべき事である。されば指揮官たるものは殆ど常に不正確で而かも断片的なる敵状を得るに過ぎないのであるから之を至當に解釋し、自己の任務を基礎とし適時適當の決心を定め、確乎不拔の意思を以て斷行せねばならんのである。否らざれば事々皆時機を失し終に挽回し得べからざるに至るのである。

抑も敵は幾日前から輸送を始めたか、又其の輸送力が幾何なるか固より

確知し得ないのであるから、目下幾何位の兵力が姫路に集合して居るか毫も推察し得ないのである。けれども師團の兵力を輸送する爲には、多くの列車を要するのである、其の輸送完結の日數は、固より一日の列車數に因るのであるが、恐らく兩三日では出來ないであらう、兎に角師團の全力が既に集合し終つて居ることも無いであらうと察せられるのである。蓋敵は固より我旅團の上陸に先つて之を察知したに相違無い。普通の状態にありては、我上陸動作を妨害し得ざるにしても、取敢へず姫路に到着せる部隊を以て我れの明石以西に進出することを妨害すべき筈であらう。然るに旅團の上陸中は勿論、完了したる當日に於ても何等注目すべき事柄を見ないのである。漸く本日而かも旅團の明石に到着する稍く前に至り、始めて加古川の左岸に其の歩兵部隊が顯れたのである。是或は敵が意外にも我動作を知らなかつたのであるか、否らざれば姫路に

八
到着せる兵力が我れに向つて活動し得るに足らないのであらう。而して加古川左岸に於て諸渡河點を占領したのは、或は先着團隊が此の河線によりて後續團隊の集合を掩護するのであるまいかと考察し得るのである。要するに現在見得たる僅少なる歩兵部隊ばかりで無く其の右岸には若干の部隊が現在居るに相違無い。とは謂へ本日の情況は必ずしも明日尙ほ繼續するもので無い。其の兵力は一刻を経過する毎に増加するのである。一幕は一幕を追ふて我れに不利の景況を呈するに至るのである。本日に於ける我れに有利なる状態が明日も變化しないと即斷するは固より淺慮である。國包から高砂に至る線上に引き張られたる幕は、極めて厚く且深黒色であつて半透明のものでない。其の内部の行動は之を蔭影的にすら見ることを得ないのである。撃柝一たび報じたならば準備完成し秩序整然意氣堂々として旅團の眼前に顯出することを豫想し得るので

任務遂行
の手段に
就て

ある。而かも撃柝の一報は極めて近き將來に起ることを覺悟せねばならん。であるから一刻も猶豫すべき時機で無いと謂はねばならん。抑も敵を抑留すると言ふのは之を抑へ留めて置て、軍の方面へやらないやうにするのである。之が爲には攻撃動作も起つて來るであらう、又絶對に防禦を要求することもあらう。是等は時機と場處とに應じて、兩者何れかを選択せねばならん。が、要は確實に抑留するのに歸するのである。敵と離隔して居つたならば、自己は安全である。併し抑留することには出來ないのである。蓋姫路から京都平野に進出するには、獨り當方面ばかりで無く、北條―篠山道を経るものもあるのである。幸に國包の北方には未だ敵を見ないのであるから現況上差當つての顧慮を要せない。けれども旅團が加古川左岸の地區に躊躇して居つたならば、敵は加古川を牆壁として我れを遮り、主力を提げて上記道路から東進するかも知れ

行進目標
の選擇に
就て

るのである。果して斯くなつたなら、抑へ留むることが困難となるのである。であるから常に敵に接着して自由なる行動を取らせないやうにして居らねば、抑留することは出来ないのである。さうであるにも拘はらず金ヶ崎附近若は其の他に防禦陣地を占領しやうと云ふ決心を取られたのは、畢竟任務を至當に解釋し得なんだに歸するのであらう、けれども又一方に於ては任務を忽にした責は免れるのであらう。

今や敵は未だ集合を終らないと判断し得るのである。此の際攻勢を取つて其の先著部隊に打撃を與ふことは必ずしも不可能でなからう、尙ほ之を後續部隊の頭上に壓へ付け、更らに打撃を與ふことを得ば、愈々我任務を有利に達成し得るのである。徒らに座して敵の優勢に至るを待つは至愚である。北條―篠山道方面に顧慮を要せない現況は、我れに取りて一大幸福である。此の幸福とて決して永續すべきものでない。此の

+

過ぎ去り易き短少の時機に乗せなかつたならば、或は加古川に顯出したる敵をも撃破し得ざるに至るかも知れん。其の姫路に迫り後續部隊に打撃を加ふことは尙ほ更ら出来ない。のみならず其の自由なる行動を防止することが出来ないのである。蓋北條―篠山道を制するのは、姫路附近に在りて敵に接着しあるのが最も宜いのであらう。であるから一日も猶豫することなく前進せねばならん。而して差當り上述の目的を、妨害するものは加古川の敵である。それが左程の兵力で無いとしても容易に渡河することは出来ないであらう。而かも敵が我渡河を妨害せんとして諸橋梁を撤收若は破壊し、且所要の地點を守備して居つたなら我れの加古川以東に進出するのは愈々困難となるのである。況して敵は此の障壁を利用して我前進を遲滞することを努むるに相違ないのであらう。で、明日は差當り目標を加古川の線に取つて前進せねばならん。其の攻撃の區

處に就ては全般の状況を觀察した結果に由るのであつて、豫め之を爲すことは出来ないのである。

偕て旅團長が差當り加古川の線に在る敵を撃破せんと意思を有して居つても、其の前進途中にて敵と衝突するの顧慮を念頭に置かないと言ふので無い。前に述べた通り、敵は刻一刻を追ふて増加するのであるから或は前進し來るかも知れん、尙ほ又加古川左岸の占領が前進の爲かも計られん。敵は矢張敵であつて、屈すべからざる意思を有て居る完全なる生物であるから我考察した通りに行動するとも限ぎらない。苟も一步を踏み出したなら敵に遭遇することを覺悟せねばならん。唯遭遇するかも知れんからとて停止するのは絶対に不可であると言ふのである。斯かる不意の出來事があるから警戒行軍が實行されるのである。若しも明確に加古川以東の地區にて敵と衝突することないと分つたなら、縱令彼我互

行進の區
處に就て

に接近して居つても、警戒行軍を爲すに及ばない、旅次行軍に依りて軍隊を愛惜するのが宜いのである。凡そ軍隊が一の目標を定めて、之に向ひ前進する爲に軍隊區分を規定して、嚴重の警戒部署を爲し、或は軍隊使用の便利を講ずるのは、一に行軍途中に於ける對敵顧慮に因るのである。斯くて不意に敵と衝突したならば、茲に遭遇戦が起るのである。各兵科の操典が吾人に遭遇戦の原則を與へられてあるのは、正さに之が爲である。されば明日旅團が前進するに就て、如何に區處せねばならぬかの問題を生ずるのである。之を答解する爲には、先づ以て國包、加古川町及高砂方面を研究せねばならん。

高砂は加古川の下流に於ける渡河點であることは明瞭である。而かも高砂なる市街と海岸道上に於ける各部落との連絡の關係から見ても、此處に永久橋梁の存してあることは疑なきことであらう。けれども此の方面

は甚しく海に接着して居つて、而かも加古川と洗川とに挟まれ、山陽道方面に近づくに随ひ甚しく狭小となつて居る。であるから軍隊の行動は頗る窮屈である。又高砂から海岸道を東進する程愈々海に接着して居る而かも山陽道方面に對しては常に瞰制を受け、尙ほ且海を背にして戦闘せなければならぬ不利がある。東進すれば、する程愈々此の不利を増加するのである。それであるから、高砂方面には敵の大なる部隊が居らぬでもあらう、又前進し來らないであらう。縦令へ大なる部隊が前進し來ればとて上述の不利に對しては、我れの利益であるから、此の方面に就て甚しき顧慮を要さないのである。之に反して國包方面は直接に三木姫路を連絡する交通路が通じて居つて、而かも加古川左岸の地區に於ける作戦に關し頗る要機を存するのである。固より國包に永久橋の存すると否とは確知しない、けれども既に敵の一部隊が左岸を占領して居るか

らには新たに橋梁を架設してあるか、或は十分の渡河材料を準備してあるに相違ない。其の何れにしても敵が容易に渡河し得るものと考察せねばならぬ。敵が容易に渡河し得るとせば、此の方面から縦令へ一部の敵たりとも、我れの山陽道を前進するに對して顯出したならば、我れは甚しく右側に脅威を受くるに至るのである。而かも此の脅威の爲には頗る不快を感じるのである、又頗る危険に陥るのである。であるから或は速に退却するの已を得ざる情況に歸するかも知れん。詳はしく言へば我後方連絡線たる山陽道を東に到るに随ひ、愈々海に接着して、側背に軍隊行動の餘地を缺如して居るから、不利の情況を忍びて一地に長く停まらば、終に海中に壓迫せらるるに至るのである。であるから苟も不利の情況に際會したならば、側方から脅威を受けざる地點まで退却せねばならぬやうになるのである。若此の状態を彼我相反して考へたならば敵の受くる

不利の影響は正さに上述の我れと同様である。されば旅團の主力を提げて國包方面に前進せねばならぬであらうか。是熟考を要することである。敵の主力の位置は固より推知し得ないのである。けれども敵が止まつて加古川以西の地區に在るとも、將た前進して加古川以東の地區に來るとも全く山陽道方面を開放することは無いであらう。蓋敵が全く集合を終り其の後方連絡線を北方に轉換したる場合に在りては、いざ知らず、尙ほ姫路を集合地點として現在集合しある時期に於て、最も緊要なる方面を開放するが如きは、決して有るまじき事である。それであるから敵が主力を提げて、態々北方の地區から東南若は南方に面して戦闘するやうなことは爲さぬであらう。我旅團に在りても、後方連絡線の關係は同様である。若しも主力が國包方面にて敵の一部と對戰中、山陽道方面を突破せられんか、北方山地内に壓し込められるに至るのである。であるか

ら此の方面に主力を使用せんとせば、豫め後方連絡線の變換を準備せねばならぬ。是實に目下の情況に應ずる適當の處置でなからう。斯かる準備の爲に時日を費すに隨ひ、敵は愈々其の兵力を増加するのであるから、我れの行動は愈々困難となるのである。それであるから旅團の主力は山陽道を前進するのが現況に適當するのである。とは謂へ國包方面は上述の如き作戰上の要機を存して居るのであるから、敵が相當の部隊を使用するに相違ない。我れも亦單に此の方面に於ける敵に對せしむるばかりで無く、積極的行動を爲すに足るべき強大の部隊を前進せしめて、主力の右側背を確實に掩護すると同時に山陽道方面に威力を及ぼすことを計らねばならぬ。

以上詳はしく述べた所に由り、旅團長の當然有すべき意思、並此の意思を貫徹せんが爲の差當ての決心、即ち明日に於ける前進目標及其の前進

に就ての區處の概要を定められたのである。此の事項を文句に顯はしたなら宜いのである。併し前に述べた所は、學習上有ると有らゆる事項を一も餘す所無く考究したのであつて、之を成文的に記載するに方りては、其の要を摘み最も簡潔に、所謂多く考へて短かく記することを勉めねばならん、其の冗長なるものは巧妙なる文章であつても嫌ふ所である。

決心

旅團は明日二縦隊トナリ加古川ノ線ニ向ヒテ前進セントス

理由

姫路ニ於ケル敵ノ集合ノ景況ハ未タ之ヲ知り得サルモ本日午後四時頃始テ其歩兵部隊カ加古川左岸ノ諸渡河點ヲ占領スルニ至リシハ是

決心、
處置

或ハ著シク進捗セサルノ結果其先着セル團隊ヲシテ加古川ニ依リ後續團隊ノ集合ヲ掩護セシムルニアラサル無キヤ蓋疑無キ能ハサルナリ果シテ然ランカ旅團ハ先ツ加古川ノ敵ヲ撃破シ直ニ姫路ニ前進セサルヘカラス若夫之ヲ後續團隊ノ頭上ニ壓迫シ得サルトスルモ敵ノ自由ナル行動ヲ抑止スル爲ニハ必ス姫路附近ニ前進シ敵ト近接シアラサルヘカラス然レトモ敵ハ刻一刻ヲ追フテ増加スヘキヲ以テ我ノ之ニ處スルモ慎重ナルト同時ニ最迅速ヲ期セスンハアラサルナリ是故ニ旅團ハ明日加古川ノ線ニ向テ前進スルヲ要スヘシ

高砂方面ハ甚シク海ニ接着シ軍隊ノ行動ノ餘地頗ル狭キヲ以テ彼我共ニ大ナル部隊ヲ此方面ニ使用スルコトヲ欲セサルヘシ隨テ深く顧慮スルニ足ラス之ニ反シテ山陽道ハ姫路ニ通スル首要ナル道路ニシテ我ノ後方連絡線ナルト同時ニ此方面ニ於ケル地形一般ニ廣開シ大

兵ノ運動ニ適シアルヲ以テ敵モ亦此方面ニ其主力ヲ行動セシムルナ
 ラン蓋加古川以西ノ地區ニ於ケル姫路―國包道方面ハ一般ニ山地ニ
 シテ山陽道方面ニ比シ兵力ヲ展開スヘキ地域極テ少ク若主力ヲ此方
 面ニ使用セントセハ爲ニ山陽道方面ヲ薄弱ニシ危險ニ陥ルノ虞アル
 ヘシ然レトモ此方面ハ彼我共ニ山陽道方面ニ於ケル部隊ノ側背ヲ壓
 迫スヘキ要機ヲ存ス殊ニ加古川以東ノ地區ニ於テ然リトス故ニ敵ノ
 一部隊カ此方面ニ行動スルコトヲ豫期セサルヘカラサルト同時ニ我
 モ亦一部隊ヲ出シテ上述ノ利益ヲ收得スルコトヲ計ラサルヘカラス
 況ヤ既ニ敵ノ歩兵部隊カ此方面ノ渡河點ヲ占領シアルニ於テオヤ
 是故ニ旅團ハ稍々大ナル部隊ヲシテ國包方面ニ前進シ以テ我側背ノ
 顧慮ヲ消却シ且要スレハ山陽道方面ノ敵ニ對シ勉メテ其左側背ニ壓
 迫セシムルコトヲ期シ主力ヲ以テ山陽道ヲ前進スルヲ至當トス

處置

省略ス(次キノ問題ニテ研究スル所アルヘシ)

問題

旅團長ノ降スヘキ翌日ノ爲ノ命令

右答解に就ての詳説

旅團長は既に一部隊をして國包方面に、主力を以て山陽道を前進するこ
 とに決心したのであるから、此の決心を實行し得るやうに命令を作爲す
 れば宜いのである。併し之を作爲するに就ては尙ほ考究すべき事項が有
 る。

既に述べた通り、國包方面は彼我共に山陽道方面に於て行動しある軍隊の側背に壓迫するのに最も適當して居るから、敵が加古川以東に前進し來るに際しては、必ず相當の兵力を有する部隊を行動せしむるに相違無い。それ故へ我れは少くとも敵の企圖を妨害し得るに足るだけの兵力を充當せねばならん。況して此の方面から山陽道方面に於て行動する敵の側背に壓迫せしむるの希望を有して居るのであるから、僅に歩兵一大隊や二大隊では覺束無い。是非共獨立して一方面の戦闘任務を達成するに適切なる部隊を向けねばならのである。即ち完全なる歩兵聯隊に若干の砲兵を附したものを出すのを適當とするのである。

偕て此の部隊の進路に就ても考究せねばならん。唯道路の良否を以て論ずれば、一も二も無く出合、練部屋、草谷、相野を経るものを選定するの外は無からう。併し是れは一を知つて二を知らざる理論である、畢竟研究

の足らざるを惜まずんばあらざるなりと謂ふのである。試に思へ、此の部隊が草谷相野附近に到達したる際に、若し敵が城山方向から上新田方面に前進し來らんか、我左右兩縱隊は全く分斷せられるのである。而かも荒内から野村に亘る一帶の低地は、我攻撃動作を困難ならしむる障礙である。であるから、容易に此の敵を山陽道方面に壓迫することを得ないであらう。敵は此の地形の利を頼んで、微弱なる部隊を我れに充當して、其の他を提げて我主力の右側に壓迫するかも知れないのである。之に反して我部隊が上新田附近に達したる際、敵が野村東方に顯出せんか彼我兵力の關係上之を攻撃し得ざるとするも、上新田附近に於て、低地を前に控へて陣地を占領したらんには、其の猛烈なる攻撃に對しても容易に之を拒止することを得べく、隨つて主力の右側を確實に掩護し得るのである、敵の歩兵部隊が現在國包を占領して居るからとて、其の以外

から顯出しないと断定することは出来ない。凡そ我行動に痛痒を感ぜしむべき方面は、縦合へそれが背後の關係甚しく不便であつても、決して顧慮を放棄してはならん。況して城山附近には渡船場も存し、且諸方面に通ずる道路も輻輳して居るのであるから、餘程の注意を拂はねばならん所である。若しも良否の關係上、必ず前記の道路に由らなければならんとすれば、更らに一部隊を此の方面に前進せしめて、前述の不利を癒さんければならのである。然るに幸にも出合、岩岡、蛸草新を経て上新田に通ずる道路があるのである。此の道路は前記のものに比して、路幅は狭きに相違無い。然れども必ずしも不良と認むることを得ないのである。何ぜならば峻峻なる山地を通ずるのでなく、完全に開拓せられたる平地を通じて居る村道であるからである。耕作其他收穫物を運搬する等の爲には常に荷車を使用するのであるから九尺以上の路幅であるこ

出發時刻
に就て

とは明かである。歩兵は固より三列の縦隊を以て自由に通過し得るのである。尙ほ又前記の道路に比して遠いのでない。之をしも迂路と稱し、或は不良と言ふは、地圖を至當に解釋したものと云へぬであらう。前衛の兵力及編組に就ては、特に多言するを要せないであらう。即ち旅團は前進して敵に衝突を求むるのであつて、而かも其の敵が前進し來るかも知れんとてふ場合であるから、不意に敵に遭遇しても前衛が其の任務を盡すに支障なきやう其の兵力及編組を定むれば宜いのである。出發時刻は過度に早くする必要はない。全隊の運命を左右すべき要地を敵に先んじて取らねばならんと云ふやうな情況ならば、固より早きを希望するのである。今や旅團の加古川の線に到着するのに、一、二時間前後したからとて、大なる影響を來すとも思はれないのである。とは謂へ故らに遅くする必要も無い。當時、日出は午前六時頃であらう、軍隊集

合の爲には、其の場處の關係もあるが、普通一時間位を要するのである。若しも午前六時に集合地を出發せんとすれば、軍隊は午前五時頃から運動を起さねばならん、随つて其の以前に總ての用便を済まして置かねばならん、四圍猶ほ暗く爲に混雜を生じ易い。而かも人馬は早く起きねばならんから、それだけ體力を消耗するのである。抑も加古川の線までは僅に四里半に過ぎないのである。午前七時に出發しても、午前中には其の左岸に近く到達し得るのである。それであるから、故らに人馬をして午前五時以前から動作せしむるの必要はない。出來得る範圍内に於て休養するのが宜いのである。

軍隊の集合を規定するには、最大の注意を拂はねばならん。總ての軍隊を同一の場處に、而かも同一の時刻に集合せしむるのは、敵に接近したる場合に於て採用せらるべき方法である。然るに今は敵と甚しく接近し

出發の爲
の諸隊の
集合に就
て

て居るのでなく、而かも行進の區處は既に決し得られたのであるから、同一の場處に集合せしめて、遅く發進する部隊をも、空しく其の出發を待たしむるは、無益の疲勞を與ふるのである。又行進路上に行軍序列に従ひ縦隊に集合せしむるが如きは、無考の甚しきものである。各部隊が行軍長徑に従ひ、尙ほ行軍序列に依り沿道に宿營しあるならば、至極簡單に行はれるであらう。けれども、明石町の如き市街に宿營しある各部隊が、集合すべき道路に到る爲に、彼此衝突することは明かである。歩兵との衝突ならば、左程の混雜もしないであらうけれども、砲兵とても遭遇したならば、容易に整頓することは出來ない。要するに此の方法は各兵種を混ざる部隊に在りては何れの場合にも適合しない集合法である。混成旅團からのものに在りては陣中要務令に示せる師團の集合法に準じて、各部隊の宿營せる位置を考慮し、其の行軍長徑を算し、且行軍序列

に適應するやうに、場處と時刻とを規定せねばならぬのである。然て旅團の宿營に就ては明示する所なきも、其の首要なる警戒線は出合より小久保を経て藤江に亘る線であつて、旅團の大部分は明石川の左岸に宿營して居るに相違ない。それであるから、本隊先頭の歩兵部隊及砲兵隊を和坂附近に、其の他を横大道の南方乾田に集合せしめたならば宜いのである。

凡そ大行李は軍隊の後方に跟随する所の係累である。軍隊の携行すべき必須のものなるに拘はらず、之を係累と爲す所以のものは、畢竟之が指揮の困難なると、其の進退動作の容易ならざるが爲である。試みに思へ大行李長なるものは集團せる大行李の一時的指揮官に過ぎないので、統屬の關係は所屬隊長に存するのである。其の集合場に到るが如きは固より所屬隊長の命令に由るのであるから、其の集合場に到る動作の良否等

大行李の
集合に就

一に高級監視員の働きに待たねばならぬのである。然るに他隊の出發時刻、並通過すべき経路等は隊長に於ても之を知るに由しなく、随つて高級監視員とても知るべき道理のものでない。それであるから、軍隊の集合を規定する所の指揮官が、周到なる區處を爲さなかつたならば、戦闘部隊の集合を妨害したり、若は困難にするのである。則ち出發の爲の集合に關しては、特に周到なる考慮と部署とを爲すを必要とする所以である。各隊の大行李を一地に集合するのは、大行李長をして速に之を掌握せしむるのであつて、頗る希望する所である。然し總ての大行李が集合する爲には廣き地積を要するのみならず、細き水流があつても直に障碍となるのである。尙ほ又各隊の大行李が集合場に到る爲に、彼此衝突するの虞が多い。殊に市街内に多くの部隊が宿營する場合では一層甚しいのである。是等の顧慮を以てすれば、容易に之に適當したるものは得ら

れない。偕て明石川左岸の地區に宿營しあるものは、唯二條の橋梁に依るの外、他に右岸に出づべき交通路はないのである。それであるから横大道東側乾田に集合せしめたならば、明石川右岸に於ける山陽道上にて大混雜を來すのは明かである。速に大行李長の掌握に歸せんとしても、容易の事で無い。而かも出發の時刻を遅延するに至るのである。それであるから、適當に區分して混雜無く集合せしむるのが、却つて掌握するにも便利である。必ずしも一地に集合せしめねばならんと云ふので無からう。即ち明石川右岸の地區に宿營するものの爲に、和坂の西北側に、左岸の地區にて山陽道(含まず)以北に宿營するものは横大道東側に、以南のものは南側に集合せしめたならば、混雜なく集合し得るであらう。茲に序を以て一言して置く、大行李の行進順序は必ずしも行軍序列に依るものと限られてあるのではない。集合の關係や、縦隊の區分等に由りて

大行李長が時の形勢に適應する如く定めても宜いのである。勿論歩兵聯隊の一個大隊のものを他聯隊のものに置きが如きことは普通無いのである。又右縦隊の大行李を其の隊に續行せしむる必要は無い。大行李を要する場合には、山陽道から分進せしむれば宜いのである。之が爲別に迂路を取るのでも無ければ遅くなるのでも無い。

指揮官の部下に與ふる命令は、簡明確切でなければならんと云ふことは陣中要務令の示す所である。蓋簡明とは文章が簡單で、而かも意味が明瞭なること。確切とは意思が確實で而かも適切に言ひ顯さることである。結局是等の要求に就ては、命令を作為するもの大に注意を拂はねばならん事である。凡そ命令を受けた者が其の目的を達する爲には、自働的に行動せねばならんのであるから、其の知ることを要する事柄は、十分に知悉せしめ苟も脱漏してはならん。とは謂へ受令者自ら處斷し得

る事柄は毫も示めす必要は無い。のみならず餘計な事柄を記載した爲に却て指揮官の意思が鈍つたやうに見へたり、或は受令者の意思を迷はしめたりするのである。又文章の上に於て、其の意味が二様にも、三様にも解せらるるやうでは、必ず誤解を生ずるのである。斯かる事は文句の綴り方にも因るのである、けれども又文字を省略するにも因るのである。尙ほ又指揮官の意思が動搖して居つたならば、受令者は必ず迷ひを來たすのであるから、是非共確定不動の意思が、嚴然として顯はれて居らねばならぬ。唯行文の字數を減少したからとて、命令作爲の要領に合し得るものでない。命令を起草するに方りては、先づ完全にして脱漏なく、確實にして微しも迷ひを生ずることなく、明瞭にして誤解を來たすことなきやうに記載して置いて、然後に省きても宜ひ文句や、文字を搜し出して、之を削除するやうにしたならば、所謂簡明確切となるのである。漫

然筆を執りて書き下すが如きは、毫も尊ぶべき事て無い。

尙ほ茲に一言すべきは騎兵の使用である。大部隊に在りて殊に敵と遠隔しある時に於ける搜索勤務は、廣大なる地域に亘りて動作するのであるから、通常騎兵集團若は騎兵旅團が其の任に當るのであることは、陣中要務令の示す所である。混成旅團は固より軍の如き自働力を有して居らぬ。然れども一方面の作戰を擔任して居るのであるから、其の働きの範圍こそ狭けれども、總て同一意味を以て働かねばならぬのである。それであるから、此の旅團に屬せられたる騎兵は、騎兵旅團と同様の任務を擔當せしめて宜いのである。師團騎兵にありても前方に騎兵集團若は騎兵旅團が居らなかつたならば、獨立せる斥候を以て遠距離に亘る搜索を爲すのである。是は好んで斥候として使用するので無く、師團騎兵は主として之を警戒部隊に附屬せねばならんから、獨立的使用の爲には斥候

位しか使用することが出来ないからである。今や旅團は五個中隊の騎兵を有して居る。搜索すべき範囲内に於て相當の力を發展し得るのであるから、之を擧げて警戒部隊に屬するのは適當で無い。獨立して前方に使用するのが宜い。とは謂へ警戒部隊に、傳令に過ぎないだけの騎兵を配屬したのも亦適當で無い。警戒部隊が其の任務を服行するに就ては、固より近距離の搜索が必要である。其の他軍隊區分に依りて、成立せる部隊に於ても同様である。それであるから此等部隊にも其の目的を達する爲に必要なだけの騎兵を配屬せねばならん。尙ほ又突然或る方面に對して所要の搜索を遂げねばならんことが生じて來るから旅團長の手裡に一部の騎兵を掌握して置くことが必要である。唯單に傳令のみを有するばかりでは、上述の目的を達し得られないであらう。

右述ぶる所に依り翌日の爲の旅團命令は次ぎの如く作爲せらるるであらう。

軍隊區分

騎兵隊

騎兵第一聯隊(三小隊缺)

右縱隊

長 步兵第二聯隊長陸軍歩兵大佐某

步兵第二聯隊

騎兵第一聯隊第三中隊ノ一小隊

山砲兵中隊

工兵中隊ノ一小隊

衛生隊半部

左縱隊前衛

河川之戰圖 前編

軍隊區分
及混成旅團
第一旅團命令

司令官 步兵第一聯隊長陸軍歩兵大佐某
 歩兵第一聯隊(第二大隊缺)
 騎兵第一聯隊第四中隊ノ一小隊
 野砲兵大隊第三中隊
 工兵中隊(一小隊缺)
 左縱隊本隊
 旅團司令部騎兵一小隊(二分隊缺)
 歩兵第一聯隊第三大隊
 野砲兵大隊(第三中隊缺)
 後備歩兵第三聯隊
 架橋縱列
 衛生隊半部

電話隊

輜重

歩兵彈藥一縱列

砲兵彈藥一縱列

第一、第二野戰病院

第一、第二糧食縱列

混成第一旅團命令

三月二日午後九時
於明石町

一、敵ハ尙ホ姫路ニ集合中ニシテ其一部隊ハ加古川ニ近ク前進セル
 モノノ如シ現ニ僅少ナル歩兵部隊ハ本日午後四時頃國包、加古川
 町及高砂ヲ占領セリ但シ室山(國包北方)野村間ニハ未タ敵ヲ見
 ス

我騎兵隊ハ敵ノ騎兵ヲ壓迫シ本夜一部ヲ以テ練部屋附近ニ主力ヲ以テ清水新田附近ニ在リ明日ハ室山ヨリ下流加古川ノ河孟ヲ搜索スル筈ナリ

二、旅團ハ明三日加古川ノ線ニ向ヒテ前進セントス

三、右縱隊ハ午前七時玉津村出合ノ南方ニ集合シ同時前衛歩兵ノ先頭ヲ以テ出合ヲ出發シ松蔭新田、岩岡及上新田ヲ經テ國包ニ向ヒテ前進シ特ニ城山方向ヲ警戒スヘシ

四、前衛ハ午前七時歩兵先頭ヲ以テ中谷(小久保西北方約七百米)ヲ出發シ山陽道ヲ加古川町ニ向ヒテ前進シ特ニ高砂方向ヲ警戒スヘシ

五、前哨部隊ハ明朝適宜其所屬隊ニ復歸セシムヘシ

六、本隊ハ左ノ如ク集合シ出發スヘシ

歩兵第一聯隊第三大隊ハ午前七時二十分和坂西端乾田ニ集合シ前衛ヨリ約一公里ヲ隔テ出發スヘシ

野砲兵大隊(第三中隊缺)ハ午前七時二十分和坂西端ヲ先頭トシ道路上ニ集合シ歩兵第一聯隊第三大隊ニ續行スヘシ

後備歩兵第三聯隊ハ午前七時二十分横大道(和坂東方)南側乾田ニ集合シ砲兵大隊ニ接續スル如ク前進ヲ起スヘシ

架橋縱列ハ午前七時三十分明石町西端ヲ先頭トシ山陽道上ニ集合シ野砲兵大隊段列ニ續行スヘシ

衛生隊ハ架橋縱列ニ接續スル如ク其宿營地ヲ出發スヘシ

電話隊ハ一部ヲ右縱隊ト共ニ前進セシメ主力ハ左縱隊本隊ノ先頭ニ在リテ行進スヘシ

七、大行李ハ午前八時十分左ノ如ク集合シ本隊ヨリ約二公里ヲ隔テ

テ跟随スヘシ

明石川右岸ノ地區ニ宿營セシ部隊ニ屬スルモノハ和坂西端乾田ニ同川左岸ノ地區ニ於テ山陽道(之ヲ含マス)以北ニ宿營セシ部隊ノモノハ横大道ノ東側乾田ニ、山陽道以南ニ宿營セシ部隊ノモノハ横大道南側乾田ニ集合スヘシ

八、輜重ハ午前九時宿營地ヲ出發シ其先頭ヲ以テ大久保ニ到ルヘシ
九、予ハ本隊ノ先頭ニ在リテ行進ス

混成第一旅團長 陸軍少將某

此命令ハ之ヲ印刷シテ各戰術單位部隊ニ分配シ得ル葉數ヲ各隊命令受領者ニ與ヘタリ但シ輜重ニハ傳騎ヲシテ送達セシメタリ

混成第一旅團命令

三月二日午後九時
於明石町

一、敵ハ尙ホ姫路ニ集合中ニシテ其一部隊ハ加古川ニ近ク前進セルモノノ如シ現ニ僅少ナル歩兵部隊ハ本日午後四時頃國包、加古川町及高砂ヲ占領セリ但シ室山(國包北方)野村間ニハ未タ敵ヲ見ス

二、旅團ハ明三日ニ縱隊トナリ加古川ノ線ニ向ヒテ前進セントス
右縱隊(歩兵第二聯隊騎兵一小隊山砲兵中隊工兵一小隊)ハ午前七時前衛歩兵ノ先頭ヲ以テ玉津村出合ヲ出發シ松蔭新田、岩岡、上新田ヲ經テ國包ニ向ヒ前進ス

左縱隊(旅團ノ主力)ハ午前七時前衛歩兵ノ先頭ヲ以テ中谷(小久保西北方約七百米)ヲ出發シ山陽道ヲ加古川町ニ向ヒ前進ス

三、騎兵隊ハ明朝其宿營地ヲ出發シ室山附近ヨリ其下流ニ於ケル加古川ノ河盃ヲ搜索スヘシ但一小隊ヲ午前六時二十分迄ニ玉津村出

合ニ出シ右縦隊長ノ指揮ニ入ラシムヘシ

四、予ハ左縦隊本隊ノ先頭ニ在リテ行進ス

混成第一旅團長 陸軍少將某

此命令ハ之ヲ印刷シ其六葉ヲ傳騎ニテ送達セシム

三月二日及三日朝に於ける騎兵隊の情況

三月二日騎兵隊は姫路方面を搜索すべき任務を以て神戸を出發した。但し出發に先だち騎兵隊長は國包及加古川町方向に各數組の將校斥候を派遣した、尙ほ旅團長の命令に依り今朝早く將校斥候を兵庫、車、木見、福住、三木町を経て小野河谷に出した。

午後一時頃騎兵隊は明石に到着した。此の時までには、敵に就て何事も得なかつた。そこで騎兵隊長は四十分間停止して人馬を休養することに

決心し、それぞれ命令を降して休憩に移らしめた。但し騎兵隊の明石に到着した事、並未だ敵を見ない事等を第一報告として旅團長に呈したのである。此の間に兩方面の將校斥候からの報告に依りて、左の事を知つたのである。

山陽道方面に在りては午前十一時三十分敵の騎兵約百、加古川停車場の東方にて休憩して居つた。國包方面では午前十一時四十分敵の騎兵部隊(少くも百を下らず)が國包を出發して東進した

間も無く騎兵隊長は山陽道方面の將校斥候からの報告に依りて、加古川停車場の南方に休憩して居つた敵は零時に前進を起した、尙ほ其の後方にも騎兵部隊が續行する模様であると云ふ事を知つた。そこで騎兵隊長は第五中隊を國包方面に向はしめ、主力を以て山陽道を前進した。此の時恰も午後一時四十分であつた。(右の情況は之を第二報告として旅團長

に呈したのである。以下特に報告文等を練習するの外は一々報告の事を記せざるも適當の時期に報告したるものと知られたし

午後二時十分頃に至り、彼我の斥候が大久保村大窪、三軒茶屋、八木の線に於て衝突したが、間もなく我前衛の前進につれて、敵の斥候は漸時に西方に引き退いた。我前衛の先頭が三軒茶屋の西北端に達した時に、敵の騎兵部隊が金ヶ崎の東南端にて徒歩戦を準備して居る。尙ほ其の東北方高地脚にも一部隊が占領して居るのを見た。そこで前衛は此處に停止して偵察したが、山ノ下(部落の名)の西方から山陽道を横斷して、柳井の東側に流るる細流の幅は二米餘であつて、道路の外は通過し得ないのである。又山ノ下の南端には敵の騎兵十二三名が徒歩戦を準備して居る。江井島の東端にも敵の騎兵が居つて東江井に居る我一分隊の下士斥候と相對峙して居る。そこで前衛司令官は取り敢へず一小隊をして徒歩

戦に依りて山ノ下の敵を驅逐せしむることを計つた。此の小隊は大窪北方無名祠の林縁に散開して射撃を開始した。敵は不意の射撃に驚き狼狽して部落内に退いた。我小隊は直に進んで該部落を占領したが、敵は更に其の西北方隘路入口に停止して我に抵抗した。而かも兵力は増加して略々我と同等となつた。

此の時騎兵隊長は三軒茶屋に在りて前衛司令官と共に右の情況を知つた最早前衛司令官の獨斷に委すべきものでない、必ず自ら處置せねばならんであらう。

問題

此時ニ於テ騎兵隊長ハ如何ニ處置スルヤ

答 解

答解に就
ての説明

前衛を三軒茶屋に留めて置いて、主力を以て松蔭新田から北方に進み、古郷方面から敵の背後に進出すると云ふが如きは、頗る迂遠極まるのである。又本隊の一部を大久保町から江井島に進め、長坂寺に向ひ敵の側背を脅威せしむると云ふも亦迂遠である。前面の敵は、其の占領せる正面から考へても左程の部隊でないことは明瞭である。唯細流並街道側の水池の爲、正面からの攻撃を不利ならしむるのである。今や山ノ下の敵は全く驅逐したのであるから、大久窪より西脇方面に出づるのは容易であらう。勿論西脇には一部の敵が居るであらうけれども、此の敵に對しては、細流左岸の小樹林及二つ池（大窪より西脇に通ずる道路の兩側にあるもの）附近から、射撃を向けたなら驅逐することが出来るであらう

併し西脇を占領したのみでは、未だ敵を撃退することは出来ないであらう。何ぜなれば金ヶ崎の村端及其の東北高地に對して、火力の優勢を占め得られないからである。勿論敵よりも非常に優勢なる銃數を配列すれば驅逐し得るのである、けれども元來騎兵が多くこの部隊をして徒歩戦を爲さしむるは損である。他に方法が無いならば已を得ないのであるが、現在では決してないのでは無い、即ち機關銃の使用である。本隊は既に後方に到着して居るのであるから、今直に使用することが出来るのである。徒歩せる一小隊に機關銃二挺を附して、西脇を奪取せしめ、散在しある家屋の間に据へて射撃したならば、敵は恐らく直に動揺するであらう此の機を逸せず前衛が山陽道上から突進したならば、効果を得るに相違ないであらう。又是が早道である。北方から迂回したり、一部を海岸方面から廻はしたりするのは、時間を費し、勞効相償はない。のみならず

各方面でも此の面に於けるが如き情況に遭遇するかも計られんのである。其の都度更に迂回を重ねれば、兵力は分散し、而かも目的點に達するところが出来ないやうになるのである。斯かる處置はかりそめにも採つてはならぬ。

以上述ぶる所に依り騎兵隊長は左の如く處置するであらう。

騎兵隊長の處置

- 騎兵隊長の處置
- 一、前衛ノ一部(約半小隊)ヲシテ西大窪西方約四百米ノ小林ヲ西脇ニ對シテ占領シ該方面ニ前進スル部隊ヲ掩護セシム
 - 二、第四中隊長ヲシテ徒歩セル約一小隊及機關銃一小隊ヲ指揮シ西脇方面ヨリ敵ヲ攻撃セシム
 - 三、前衛ノ主力ハ三軒茶屋ニ在リテ山陽道上ヨリ突進スルノ準備ニ

騎兵隊長の處置

アラシム

- 四、本隊(西脇ニ前進セシ部隊ヲ除ク)ハ三軒茶屋ノ西南端ヲ先頭トシ道路上ニ在リテ前進ノ準備ニアラシム

情況

右の處置は直に命令せられた。前衛から將校の指揮する半小隊を二つ池の西南第二番目の小樹林に出した。此の部隊が小樹林に接近するや、西脇の東南端に敵の徒歩騎兵二十名許り顯れて射撃を開始した。我部隊も之に應射した。次で本隊から出されたる小隊及機關銃小隊が西大窪の北方に進出した。敵は更に増加して西脇の東端に亘りた。我小隊は二つ池の西端に散開して、之を射撃した。暫く對戦の後、敵は我銃火に耐へ得ずして部落内に退いた。我小隊は直に前進を起した。機關銃小隊は之に

續行した。前衛から出た半小隊は直に前衛の處在地に引き揚げた。二つ池から前進した小隊が西脇の西端に出づるや、金ヶ崎の村端並其の東方高地脚から劇しき射撃を受けた。小隊は直に應射したるも、敵は優勢にして、我は暫時の間に制壓せらるるに至つた。恰も機關銃小隊が寺院の南側に出て、先づ金ヶ崎の村端に向つて射撃を開いた。此の敵は終に耐へ得ずして動搖を始めた。此の有様を見たる前衛司令官は道路上を金ヶ崎に向つて突進した。兩方面の敵は狼狽の有様にて敗走した。我小隊及機關銃は直に之を追撃した。前衛は金ヶ崎に進入し、敗殘の敵兵數名を殺傷したる後、尙ほ追撃して東長池に達した。此の時敵の騎兵部隊が清水東方森林の東側畑地に開進して居る。併し其の前方列の頭を見られ得るので其の他は頂界線の爲に掩蔽せられて居るから、確に其の兵力を算することが出來ない。尙ほ古刀及清水の獨立標高三四、八の處にも部

隊が居る模様である。間も無く西脇から追撃して來た小隊及機關銃隊も到着した。次で騎兵隊長も來た。前衛からは既に所要の斥候を出したのであるが、未だ報告を齎して來ない。斯くする内に頭部のみ見へて居つた。敵は全く見へなくなつた。そこで前衛司令官は將校の指揮する半小隊を古刀に向はしめた。此の部隊が発進するや、古刀から數發の射撃を受けた。けれども何の損害も無く前進することを得た。間も無く古刀に達した。最早上新田の近傍には敵を見なかつた。又清水の獨立標高三四、八の敵も既に退却して、今は其の後尾らしきものが清水西北方を退却して居る。そこで、此の小隊長は傳令を以て右の情況を前衛司令官に報告せしめて置いて、更に上新田に向つて前進した。

前衛司令官は右の報告を受くるに先ち、清水の獨立標高三四、八の敵兵退却せしを知りて直に前進した。此の際、山ノ下方面の小隊から連絡兵

が来て、下の事を言ふた第四小隊は山ノ下から退却せる敵を追撃して、天郷に到りしに、敵は古郷の無名祠の南端に徒歩戦を爲した。よりて小隊は中新地方面に前進し、それより古郷に向ひしに、敵は既に退却して影を没した。小隊は暫時古郷に停止して前方を搜索して居る。

前衛は前進して清水新田に達した。此の時、敵の部隊は土山の東南端及東側並天満村野際の南端を占領し、且其の中間各處に斥候を停止せしめて居る。又海岸道を前進せし下士斥候の報告に依れば、川端及本莊の各村端は何れも一分隊乃至二分隊位の敵が占領して居る。尙ほ土山、中野間の林縁及部落には點々斥候が停止して居る。

騎兵隊長は聽て清水新田に到着して、右の有様を前衛司令官からの報告に依りて知つた。尙ほ古郷方向から岡に向ひし小隊の報告によりて、出新田及岡並大池の西部突角の道路上に敵の斥候が停止して居ること及國

包方面に向ひし中隊から出せし下士斥候は目下蛸草新に在りて上條附近に在る敵と相對峙して居ることを知つた。間も無く第五中隊長の報告が到着した。其の報告に依れば、南部印路に於て始めて彼我の斥候衝突せしが、中隊は之を追ふて小鳥喰池の南方に到つた。此處で五六十騎の敵と衝突したが、中隊は之を驅逐して午後三時新々田に達した。目下敵の主力は野谷新に、一部は上條附近に居る。明石―三木街道に於ては、小東野以南に敵を見ないのである。

又騎兵隊長は此の時前衛騎兵からの連絡に依りて旅團の前衛は午後四時三十分頃に明石の西端に達すべきこと、及旅團は本夜明石町に宿營する豫定であることを知つたのである。此の時正さに午後四時二十分であつた。

是に於て騎兵隊長は宿營することに決心した。

問題

騎兵隊宿營配置

右答解に就ての詳説

騎兵隊は旅團の宿營を警戒又は掩護するやうな任務を毫しも有して居らぬのである。是等警戒の爲に使用されるのは前哨に配屬せられたる騎兵である。此の騎兵は晝間は歩兵警戒線の前方に在りて搜索に従事して居るけれども、夜間には普通警戒線内に歸來するのである。勿論敵と接近して居つて、之と觸接を絶たないが爲、又は遠く前方の地點を占領さして置きたい場合は其の一部を警戒線の前方に在りて行動せしむることがある。併し前方の大切な地點を占領せしめたり、或は前哨線に依りて

遠地搜索に任せし
騎兵隊の
宿營に關
する意義
に就て

警戒されて居らぬ側面を警戒せしむる時のやうな騎兵は、前哨區内を警戒すると云ふ意味を離れて居つて、全く獨立して居るのと差別は無い隨つて其の警戒も獨立する騎兵と殆ど選ぶ所無いのである。抑も當騎兵隊は遠地搜索の任務を以て行動して居るのである。本夜は其の後方近くに旅團が到着するのであるけれども、未だ土山以西の情況は分らるのである。之を知らんが爲には差し當り敵の張れる掩蔽幕を突破して内部に入せねばならん。然るに地形は此の動作を困難ならしめて居るから、瞬時の成效は覺束無い。尙ほ日没まで多くの時間を有するならば、百難を排しても突破することを努めねばならんが、最早日没に接して居るから其れよりも夜暗を利用して多くの斥候を潜入せしむるのが却て目的を達し易いのである。左れば斥候を出すからとて、全聯隊を終夜休まず集合せしめて置く必要はない。是れが則ち騎兵隊長の宿營に決心した所以で

ある。決して旅團の宿營を警戒するの意思で前進を中止したのでは無い。又旅團との距離が近くなつたからとて自然に前哨の騎兵となるものでもない。任務が變らない限りは、距離の遠近に拘はらず、獨立して行動して居る騎兵は、前進と宿營とに論無く、矢張り獨立して居るのである。それであるから、此の騎兵の警戒を爲すのは後方に休憩する旅團の爲で無くて、騎兵隊其のものの休憩を警戒するのである。而して騎兵隊の任務は依然搜索であつて後方軍隊の警戒では無い。本夜に於ける騎兵隊の宿營配置を研究するには先づ此の事を詳知しあらねばならん。

偕て休宿しある騎兵の戦闘用意を整へて出發する爲には、歩兵よりも餘程多くの時間を要するものである。それにも拘はらず、前哨勤務は甚しく馬匹を疲労せしむるから、勉めて其の兵力を節約し、通常縦長區分の前哨配置に依らないで、諸種の補助手段を施して警戒を完ふすることを

前哨及宿
營配置に
就て

圖らんければならのである。補助手段と言へば、即ち通路を閉塞したり、簡易なる障礙を設けたりするのである。併し是等の補助手段を實施するにも限りあるのであつて、土地の状態によりては、終に警戒を完ふすることが出来無い。それであるから休憩の爲には、守護の力を有する地區例令へば河川若は狹隘の後方を選ぶのである。斯の如き場處は補助手段も簡易で済むし、而かも警戒の爲に大に兵力を節約し、且輕易に實行し得るのである。若しも戰術上の情況が現在到達しある地點に居ること、或はそれよりも尙ほ前進するとを要求しないならば、若干後方に退いても上述の如き守護力を有する地區の後方に休憩するの利益を收むるのが却て宜いのである。以上述ぶる所は獨立せる騎兵の前哨並宿營に就て與へられたる原則である。今や騎兵隊は此の原則に従つて宿營を區處せねばならのである。但し獨立して前方に在る騎兵は通常大行李を携

行し居らぬ。縦令へ本隊との距離が甚しく隔たつて居らぬとも、多くは送つて來ない。縦令へ送り來るも、其の到着するのは非常に遅いのであるから、之を待つて給養するが如きことは實際爲し得ないのである。携帶せる糧秣に依るか、成し得れば地方にて調辨するのである。であるから宿營すべき土地の附近にて物資を得らるることは殊に希望せらるるのである。尙ほ又多くの馬匹を有して居るのであるから、相當の地積を有する馬繋場を要するのである。而して此の馬繋場は、敵に反對する方側でなければならぬ。尙ほ風雨に對して障蔽し得ることを要するのである宿營に關しては是等の事項を總て腦裏に入れ置くべきことを忘れてはならぬのである。

警戒隊及
本隊の宿
營地に就
て

偕て金ヶ崎は右側を高地に托して、敵の直接なる近接を防止し、前方は東長池に至る間狹隘を成形し、西方は長坂寺の部落に依りて敵の進入を

防支し、海岸道は一部の斥候に依りて監視し得らるべきを以て、此處に宿營地を選定することは前述の原則に適合したるものやうである。然し之が爲には敵と遠ざからなければならぬ。若しも騎兵隊が金ヶ崎に引退せば、敵は再び其の掩蔽幕を出新田附近より清水新田を経て前山、東二見の線上に押し出すかも計られぬのである。斯くなれば更に之を何れかの地點にて突破せねばならぬ、即ち退いたが爲に斯かる手数を要するのであつて、愚も亦甚しいと謂はねばならぬ。旅團は既に後方近くに達するのである。然るに尙ほ加古川附近の情況を知ることが出來ないのである。折角捕へたる敵を放棄して引退するのは、搜索の進行を中止するのと同様である。一步でも前方に在れば、それだけ搜索が進行し易いのである。休宿する部隊に對する警戒が完全に出來るならば、安ぞ戰術上の要求をも顧みずして後方に引退せんやである。請ふ試に清水及清水新

田附近の地形を観察せよ、決して警戒が困難であると謂ふを得ないのである。又休宿の爲不利と謂ふのでもない。

偕て清水の低地に在る部分は、宿營の爲に甚だ不快の感があるやうである。併し標高六十米と二十米との地帯内に存するのであつて、水流右岸の地區とは殆ど同高である。又清水新田とは僅に四五米の標高差に過ぎない。而かも敵から直接の瞰制を受けないから、宿營地として支障は無い。尙ほ村端を流るる水流の如きは、砂地を流れて居るから、従つて水は清麗であらうし、又兩岸も砂地であつて平易なるに相違無いから、直に飲馬場に利用し得らるるであらう。尙ほ東側森林の如きは、適當なる馬繫場であらう。物資は勿論金ヶ崎に及ばないであらうが、此の附近の部落に求むれば、多少は得らるるに相違無い。それであるから警戒上の關係は暫く之を措き、宿營地としては敢て不利と稱することを得

いであらう。次に警戒上に就て清水新田附近を研究して見よ。清水新田は、皿池其の他多數の水池に圍まれて居つて、土山方面に對しては僅に皿池の北側及該部落の北側に部隊の運動し得べき餘地を存して居るのみである。而かも街道に接着せる水池は、愈々夜間の運動を困難にするのである。又皿池と鐵道線との中間地區は、小樹林及部落の爲、夜間に於ける部隊の運動に、至大なる障礙を與へて居る。清水新田の東方及北方は一帶の森林であつて、道路の外は部隊の運動を妨ぐるのである。此の森林を隔てて、比較的開豁したる母里村、天満村の方面に對しては、天満村の大池と其の南方小池とに依りて、緊縮せられて居るから、敵の部隊の此の方面よりする企圖を確實に止阻し得るのである。但し母里村方面から、直に清水に迫る敵の行動は、之を清水新田の勢力範圍にて止阻することを得ない。併し森林や、水池の障礙もあるから、自由に行動

し得らると言ふので無い。で、此の方面の警戒も簡易に済まして置くことが出来る。又鐵道線から海岸に至る間は、阿閉村に於て部落、水池散在して、夜間に於ける部隊の運動を困難ならしめて居る。但二見村は多少開豁して居るけれども、鐵道線は自然的工事であつて、我抵抗力を増加して居る。斯の如き有様であるから、土山方面に對して、山陽道兩側の空地に工事を施し、騎銃及機關銃を使用したならば、主なる方面に對する抗拒力は確實である。而して天満村方面は、大池と其の南方小池との狹隘を利用して之を扼守し、二見村方面に對しては鐵道の踏切を警戒し、海岸道上東二見に斥候を出し置かば、清水に於ける本隊の宿營を確實に警戒し得るのであらう。而かも清水新田の抗拒力は十分であるから、敵の攻撃に際しても之を撃退し得るか、否らざるも清水に於ける宿營部隊の戦闘準備を整へて出發するの餘裕を十分に得るであらう。

警戒線が連繫して廣き場合では、多くの前哨區に區分せられるのである。而して一前哨區の警戒は、前哨騎兵中隊或は之よりも一層微弱なる部隊が使用せらるるのである。是等警戒部隊を増援するのは、最前方に宿營する部隊が之に充たるのであつて、別に前哨本隊を置かないのである。今や騎兵隊の警戒線は、之を數個の前哨區に區分する程のものでない。一の前哨中隊を清水新田に出したならば宜い。而して前哨中隊からは、通常下士哨又は騎哨を配置するのであつて、一般警戒線中若は前方に在て特に緊要なる地點には小哨を出すのである。偕て前哨中隊が警戒線を張つて居つても、其の警戒は一層搜索に依らねばならん。勿論中隊は常に戦闘準備を整へて居るのであるから何時敵から攻撃を受けても、後方の軍隊に攻撃を迎へるだけの時間を與へられ得るのである。けれども搜索に依りて早く此の事を知り、早く通報を爲すことは何よりも宜いので

ある。であるから警戒に任ずる部隊は其の警戒の爲近地搜索を中絶せざるやう勉めねばならん。但し遠地搜索は通常警戒部隊長の爲すべきものにあらざして、全騎兵の指揮官が之を取計ふのである。今の場合では即ち騎兵隊長が當然爲さねばならぬ仕事である。

國包方面に向けたる第五中隊は、今や練部屋附近に在りて、敵の騎兵に對して居るのである。之をして一部を残置し、主力を以て歸還せしむるが如きは情況に適當しない處置である。此の騎兵にして引き揚げんか、敵は直に明石方面に前進するに相違ない。尙ほ又國包方面の搜索を中絶するのである。若しも敵を壓迫して前進することが出来ないならば、一地に停止し、數多の斥候を派遣して搜索を續行せねばならのである。搜索の爲分離しある騎兵部隊は、夜間に至るも通常其の儘各地に宿營するものであるとの原則を與へられたのは、蓋し之に外ならないのである。

海岸道は直接旅團の宿營地に通ずる良路なれば、旅團掩護の爲十分の警戒を爲さねばならんと言ふものあり。一應當然のやうである。然し既に述べた通り、聯隊は直接に旅團を掩護すべき任務を有して居らぬ。其の停止したのは搜索を中絶しない爲であつて、後方旅團を掩護するので無い。騎兵隊にして既に然り、尙ほ何ぞ一部を以て掩護に任ぜんやである。海岸道は騎兵隊の宿營に關して、放棄し得べからざる方面なることは明かである。それ故へ多少有力な駐止斥候を出すの必要は存するも、旅團を掩護せしむるが如き任務を此の小部隊に負はしめることが果して出来るや否や、蓋し論ぜずとも明かであらう。但し騎兵隊と旅團との首要なる交通線を放棄するが如き事は絶対に許すべからざる事である。例令は騎兵隊が山陽道を離れて母里村の一地區に宿營せんか、山陽道は全く開放し或は旅團との交通を絶つに至るかも知れのである。それであるか

ら首要な交通線を掩護することは、當然爲さねばならん事である。併し此の事は多くの場合に於て宿營すべき位置に依りて自然に掩護さるるのである。又そのやうにすることを勉むべきである。

以上述ぶる所に依り騎兵聯隊の宿營配置は次の如く爲さるるであらう

騎兵隊の
前哨及宿
營配置

- 一、前衛(第一中隊)ハ前哨トナリテ主力ヲ以テ清水新田ノ北側、東
- 二見ニ通スル街道附近ニ位置シ左ノ如ク警戒線ヲ配置ス
- 一、第一下士哨(下士一、兵卒四)ヲ天満村ノ大池ノ北側ニ出シ、
出新田及六分一方向ヲ監視セシム
- 第二騎哨ヲ清水新田ヨリ六分一ニ通スル道路上無名ノ小部落
(集合セル四ツ池ノ東北方)ニ出シ、六分一、野際方向ヲ監視セ
シム

第三小哨 (將校ノ指揮スル半小隊)ヲ野添ニ出シ、野際、土

山、高松方面ニ對シテ警戒シ且第四下士哨ト連絡セシム(此ノ小哨ハ該村端小池ノ附近ニテ街道ノ兩側ニ散兵壕ヲ掘設シ、其後方十字路附近ニ位置シ、第一複哨ヲ散兵壕ニ、第二複哨ヲ土山停車場ヨリ高松ニ通スル道路ノ鐵道踏切ニ出シテ監視セシム)

第四下士哨(下士一、兵卒五)ヲ布池ノ南方約四百五十米ノ小樹林(山口東北方十字路ノ處)ニ出シ、中野方向ヲ監視セシム

二、駐止斥候(一分隊)ヲ西二見ノ西端附近ニ出シ海岸道ヲ監視シ且第四下士哨ト連絡セシム

三、第四小隊(二分隊缺)ヲシテ秋田ノ北方約六百米ノ十字路附近ニ位置シ岡方面ヲ搜索シ、且練部屋附近ニ在ル第五中隊ト連絡セシム

四、清水新田ニハ皿池ト其ノ北方小池トノ間、新水新田ヨリ六分

一ニ通スル道路ト其西方小池トノ間及清水新田西方無名祠ノ北

側ニ、各散兵壕ヲ掘設ス

敵襲ニ際シテハ右工事ニ據リ固守スルモノトス但シ海岸道方面

ニ對シテハ鐵道線ヲ固守セシム

五、聯隊本部及他ノ諸中隊(第五中隊ヲ除ク)ハ清水及長池ニ村落露

營ヲ爲ス但シ第二中隊(最前方ニ宿營セルモノ)ハ直ニ前哨中隊ヲ

支援シ得ル如ク戰鬪準備ヲ爲シアラシム

六、聯隊ノ携行セル通信器材ヲ以テ前哨中隊聯隊本部及練部屋方面

ニ於ケル第五中隊トノ間ニ電話線ヲ架設シ彼此ノ交通ヲ取ル

七、第五中隊ヲシテ練部屋附近ニ宿營シ國包方面ノ搜索ヲ爲サシム

但シ此方面ニ於テ生スル情況ハ直ニ之ヲ旅團長ニ報告シ同時ニ騎

兵隊長ニモ報告セシム

情 況

午後四時五十分、騎兵隊長は宿營に關する區處を清水新田に於て命令した。之より先き騎兵隊長の宿營に決せられし際、警戒並宿營に就て大要の部署を口達せられ各隊はそれぞれ着手したから、午後五時三十分頃に警戒線を配置し終つた。仍りて本隊は清水に退いて宿營に就いた。間もなく騎兵隊長は第五中隊長の報告に依りて、此の方面の敵の警戒線は、丸山より辰己池の西方を経て三軒屋に亘り、其の主力は野寺に在るものやうである事、及第五中隊の主力は練部屋附近に在りて其の警戒線を同村の北方より上野、上場に亘り一部を蛸草新に張つてある事を知つた午後六時三十分頃に至るや、前哨中隊長は各處からの報告に依りて、出

新田から土山、本莊に亘る敵の掩蔽幕が退いたことを知つた。そこで取敢へず將校斥候を山陽道に出して進躡せしめ、第四小隊及海岸道の駐止斥候にも追躡すべき命令を與へ、同時に騎兵隊長にも報告した。此の時前後して加古川町及國包方面に出した將校斥候から午後四時頃敵の僅少なる歩兵部隊が加古川右岸から進出して國包、加古川町及高砂を占領したとの報告を受領した。

午後七時三十分から八時に亘り、前哨中隊から出した追躡斥候は何れも福澤(皿池西側)野口、圓長寺、池田の線にて拒支せられ、如何にするも内部に進入することが出来なかつた。又加古川町方面に出でし將校斥候は午後三時四十分頃までは各處に於て敵眼を避け得て、終に日岡山に達したから、此の山上に潜伏して、對岸の情態を偵察して居たが、幸に四時に至り前記の事項を得たから直に之れが報告を出し、尙ほ停止して居つ

たけれども、日没前に至り最早展望がきかなくなつたので、山を降ると、突然敵の騎兵に出會し、彼此の地に逃げ廻り終に西和田に來り、第四小隊と合して大に欣んだ。然し人馬は非常に疲勞して居るので暫く此處に休憩することとなつた。小野河谷に出た將校斥候は敵に出會すること無く午後一時頃小野に達した。が、此の附近に敵を見なかつたそこで報告を出して置いて直に前進し粟生を経て中野に到つた、尙ほ敵の一兵をも見なかつたので更に轉じて繁昌、高岡を経て再び左岸に移つた。此の途中南方に銃聲を聞くに至つた、最早日没に近かついたので小野に引き返し此處に人馬を休憩して明朝早くから右岸の地區を廣く行動することに決心して報告を出した(以上の情況は午後六時乃至八時まで旅團長、騎兵聯隊長及第五中隊長之を知悉することを得たのである)

第五中隊方面も同様に敵は退却したから、數組の追躡斥候を出したが

是亦野新村東條の線にて拒支せられ其の以北に進入することを得なかつた。國包方面に出た將校斥候も第一の報告を呈出した後、屢々危険な情況に遭遇したのであるが、兎に角逃げ廻つて午後四時上西條の南方に達した。其の時偶然にも前記の歩兵部隊を見たので、大に勇んで直に之が報告を出した。然るに我よりも稍々優勢なる敵の騎兵部隊に見附かつて追ひ廻はされ、終に午後十時頃練部屋に到着して第五中隊に合した。午後十時三十分騎兵隊長は翌日に關する旅團命令を受領した。但し午後九時三十分頃既に電話(電話隊にて架設せられたのである)にて其の要旨を聞いたのであるが、中途から電話線に故障を生じ、終に全部を聴取ることが出来なかつたのである。今や既に旅團命令を受領したのであるから、部下の各隊長に翌日に關する命令を與へねばならぬのであらう。

問題

騎兵隊長ノ降スヘキ翌日ノ爲ノ命令

右答解に就ての詳説

師團若は獨立せる旅團に在りては、上級指揮官から受けた命令に依りて其の編組内にある各部隊に、尙ほ一層分り易いやうに又一層目的の達成を適切ならしむるに必要な命令を作爲して之を與へるのである。(師團内の一部隊でも訓令を與へられることが無いとも限らない、けれども斯かる事は遠く分離して行動する場合に於て生ずるのであつて、頗る稀有であらうと思ふ)斯くて部隊の行動が規定されるのであるから、部隊の指揮官は其の軍隊に、集合の爲の命令を達して置いて、其の他の總ての事柄は集合場に於て口上にて命令したら宜いのである。尙ほ又翌日に關し

命令下達
に就て

て各部隊の運動を規定せる師團命令や、獨立せる旅團命令は、成し得る限り之を印刷して、戰術單位の部隊にまで分與せられるのであるから、随つて各部隊長は全體の情況をも詳知し、且豫め自己の行動に關して研究し得るのである。であるから、運動に關する細部の事項を前夜から命令し置くの必要は無い。殊に前方に在りて、近く敵に觸接して居る騎兵隊の如きに在りては、一層此の事が適切である。又多くの場合に在りては、唯集合の爲の命令の外、降し得ないのであらう。何ぜならば、我行動を直接敵狀に適合するやうに之を規定せねばならんからである。現在の敵狀は翌日まで其の儘の状態を持續するとも限ぎらない、尙ほ又本夜規定したる我行動が、變化せる敵狀に對して適合しなかつたならば、更に他の行動を定めねばならん。一たび規定したる行動が、如何に變化せる敵狀にも適合すると云ふことは恐らく稀有であらう。騎兵の進退動作

分離して
宿營せる
部隊への
命令下達
に就て

が他兵種より神速であるだけそれだけ情況の變化も神速である。随つて我行動を定むるに就て、敵狀の影響を受くることが多大である。それであるから敵狀に應ずる行動を規定せんには、出發前でなければ之を確定することが出来ないのである。そこで本夜降すべき命令は自然集合の事のみに留まるやうになるのである。但し新たに受けた任務に就て、翌日の爲に取るべき行動を、幾重にも研究して置くは勿論必要である。以上は主として山陽道方面に於ける騎兵部隊に就て言ふたのである。練部屋方面にある第五中隊に對しては別に之を論ぜねばならん。偕て之を論ずる前に此の騎兵中隊を明日如何に使用するかを決せねばならん。騎兵隊は國包、加古川町及高砂方面を搜索するのである。而かも國包方面では城山の如き搜索の爲の據點とも謂ふべき要地を存して居る。それであるから、現在に於て縱令へ此の方面の敵の騎兵が寡弱であつても、單

に有力なる斥候を向けるだけでは濟ませぬ、相當の戦闘力を有する部隊を向けて、多少の妨害を受けても城山を我手に歸することを努めしめねばならん。て、第五中隊を依然分離して其の方面に使用するのが宜いのである。されば斯く分離しある部隊に、翌朝出發の爲の集合を規定するの必要は無い。尙ほ又國包方面に向ふ運動を規定するの必要も無い。唯此の部隊の任務と、其の任務を服行するに就て知ることを要する事柄を遺漏無く命令すれば宜いのである。而して此の部隊長が其の受けたる任務と現在の敵狀とに應じて之に適當するやうに其の行動を規定するのである。であるから此の部隊に對しては、本夜命令を降し得るのである。勿論翌早朝に與へても支障は無い、けれども本夜與ふるも、翌朝與ふるも其の命令には異なる所が無いのであるから、早く與へて其の任務服行に就ての行動を十分に研究せしむるのが利益である。られてあるから第

五中隊には翌日の任務に關する命令を與へ、山陽道方面の直接掌握しある諸中隊には、旅團より送達せられたる旅團命令を配與すると、同時に、單に集合を命令するのが此の場合に適當するのである。

騎兵隊命令

三月二日午後十一時
於清水

- 一、敵ハ尙ホ姫路ニ集合中ニシテ其一部隊ハ加古川ニ近ク前進セル
モノノ如シ現ニ僅少ナル歩兵部隊ハ本日午後四時頃國包、加古川
町及高砂ヲ占領セリ但シ室山(國包ノ北方)野村間ニハ未タ敵ヲ見
ス

小野河谷ニ出セル將校斥候ハ本夜小野附近ニ在リ明日ハ加古川右
岸ノ地區ヲ廣ク行動スル筈

旅團ハ明日ニ縱隊トナリ午前七時右縱隊(歩兵第二聯隊、騎兵一小

- 隊、山砲兵中隊、工兵一小隊) 前衛ノ先頭ヲ以テ玉津村出合ヲ出發シ松蔭新田、岩岡、上新田ヲ經テ國包ニ向ヒ、左縦隊(旅團ノ主力) 前衛ノ先頭ヲ以テ中谷ヲ出發シ山陽道ヲ加古川町ニ向ヒテ前進ス
- 二、騎兵隊ハ明三日加古川河孟ヲ搜索セントス
- 三、第五中隊ハ明朝其宿營地ヲ出發シ城山ヨリ上流室山附近ニ亘ル加古川ノ河孟ヲ搜索スヘシ但シ一小隊ヲ午前六時四十分マテニ玉津村出合ニ出シ右縦隊長ノ指揮ニ入ラシムヘシ
- 四、予ハ明朝午前六時清水新田ヲ出發シ城山ヨリ下流ノ地區ヲ搜索ス諸報告ハ天滿村向山ニ致スヘシ

騎兵隊長 陸軍騎兵大佐某

此命令ハ筆記シ旅團命令一葉ヲ添ヘ傳騎ヲ以テ送達ス

騎兵隊命令

三月二日午後十一時
於清水

- 一、騎兵隊ハ明三日加古川河孟ヲ搜索セントス
- 二、各中隊ハ午前五時四十分清水新田東側畑地ニ集合スヘシ但シ前哨中隊ハ現在ノ位置ニ集合シ其警戒線ハ別命アルマテ撤收スヘカラス
- 三、予ハ午前五時四十分集合場ニ在リ

騎兵隊長 陸軍騎兵大佐某

此命令ハ各中隊ノ受領者ニ口達シテ筆記セシメ同時ニ旅團命令ヲ配與セリ

情 況

右の命令を達して以來、前哨中隊及第五中隊から屢々報告を受けたけれ

ども、何れをも其の大體に於ては午後八時に於ける情況と異なる所無かつたのである。斯くして終に翌三日午前五時三十分に至つた。そこで騎兵隊長は軍旗と共に清水新田の東北側に到つた。前哨中隊長から前夜來の情況を聴取つた。此の時諸隊は既に集合を終つて居る。時に新在家に居る將校斥候から報告を受けた。それは午前五時頃敵の騎兵部隊が廣岡(新池の西側)の西南方に集合を始めた、其の兵力は慥かには分らんけれども二中隊を降ら無い。又野口村の東南端無名祠及北野東端無名祠から南方に亘り工事を築設して居るやうであると言ふのである。最早午前五時四十五分となつた。騎兵隊長は自己が任務の服行に關する區處を命令せねばならぬであらう。

問題

騎兵隊長ノ任務服行ニ關シテ爲スヘキ區處(第五中隊ヲ除ク)

右答解に就ての詳説

此の附近の地形は水池、部落或は森林が錯雜して居つて、軍隊の自由なる運動を阻害すること頗る多大である。それ故へ今俄に前進を起さんよりは、暫く停止して、其の後に於ける敵の動靜を待つて、徐に處置するのが宜いと謂ふ考案が出来たのであらう、併し此の考案は頗る迂遠である。勿論地形は溜池、部落及森林等にて錯雜して居る、軍隊も自由自在に飛躍することは困難であらう。又最も狭い部分で敵と衝突したなら、之を排除することは容易でないに相違なからう。然し何時まで待てば、敵が新たに動作するであらうか是實に未知の問題である。斯かる未知の問題を悠々として待つて居つたなら、適當の時機に情報を收むることが出来なく、

騎兵隊長
の決心に
就て

全く劣勢なる敵に致たされ終るのである。實に至愚と謂はんければならん。地形が如何やうにあらうとも、既に敵の主力とも思はるべき部隊を發見したからには、直に之に向つて進まんければならのである。決して躊躇すべき場合で無い。偕て之に向つて前進するに就て山陽道を選ぶのは、一考再考を要するのである。道路の状態は勿論他に比して良好である。又他に迂回するよりは、直進するだけそれだけ近いのである。けれども今受領した敵狀に基いて、野口村附近に於て起るべき戦闘の景況を豫想したならば、此の道路を前進することの必ずしも利益でないことが分るであらう。抑も廣岡の西南に集合せる敵は依然として其の地に居るか、或は他に運動せんとするものであるか、固より之を知ることが得ないのである。とは謂へ敵が東方に前進するの企圖を有して居るならば、昨夕態々其の警戒幕を退けるやうな事を爲さぬであらう。又現在の我れに對して

首要なる山陽道を開放して北方の地區に運動することも無いであらう。されば或は依然として此處に居るかも知れのである。而かも野口村の東南端及其の附近には昨夕から守備して居つて、工事をも築設して居るのである。そこで我れが山陽道を前進したならば、先づ以て此の障碍を排除せねばならん。之が爲には新在家の東側に展開して向はんければならん。此の攻撃前進中に、廣岡附近から我右翼に襲撃し來らば、其の狀態果して如何なるか、想へば實に戦慄に堪へないであらう。されば、直に廣岡附近に集合せる敵に向はんか、野口村若は北野の敵から妨害を受くるのである。であるから何れにしても先づ野口村若は北野に向はんければならのである。即ち此の攻撃に關しては危険の避けやうがないのである。又機關銃を使用したからとて金ヶ崎附近に於て收め得たるが如き迅速の効果は之を此處に求むることは困難である。何ぜならば工事に據れる敵

に對して、而かも正面からする射撃は其の及ぼす所の効力鮮く、且地形上敵の目視外から陣地に着き難いから、随つて瞬時の間に之をして動搖せしむることを得ないからである。固より攻撃しても慎重なる方法を取らば強て失敗すると云ふのではないけれども、奏功するまでには夥多の時間と犠牲とを供せねばならぬであらう。尙ほ敵の背後には近く歩兵が控へて居るのであるから、攻撃が遅延すれば、するほど奏功の見込が減少するのである。斯く困難な動作を爲してまでも此の方面に向はねばならんかと云ふに、必ずしもさうでなからう。抑も加古川の河孟を搜索する爲には、第一着に日岡山に注意せねばならぬのである。即ち日岡山にして一たび我手に歸せんか、加古川一帯の河孟を手取る如く見られ得るのである。斯の如き地點は騎兵隊が任務を盡す爲に最も價値ある緊要の地點と謂ふの外は無い。縦令へ野口村附近の敵から甚しき抵抗を受けないで

容易に通過し得るとしても、加古川町には敵の歩兵部隊が居るのであるから之を撃退するにあらざれば河岸に進出することは出来ない。然るに野口村加古川町間は大に開豁して居るから機關銃の力を頼むも我攻撃の容易に進捗しないことは明かである。であるから自然他の方面、即ち日岡山方面に轉進するやうになるのである。それならば當初から山陽道以東の地區を日岡山に向つて行くのが宜いのであらう。固より此の前進に對して、野口村附近に居る敵から妨害を受けないとは言はれない。併し寺田池、今池、新池等の連続せる溜池に依りて彼我を分斷して居る。而かも彼れは低地、我れは高地であるから、其の妨害も左程痛痒を感じない尙ほ此等溜池の東側には處々に森林ありて、我運動を蔭蔽するのである。是等は總て我動作に對して最大の利益を與ふるのである。それであるから、神速に目的を達成すると云ふ公算の鮮い方面に前進するよりは

上記の利益を収めつつ早く日岡山に達することを努むるのが早道である尤も日岡山とて敵の部隊が占領して居らんとは言へない。併し何れの方面に向つたとて、敵を驅逐せずして自由に搜索し得られるものでない。搜索の爲には敵の騎兵は勿論、歩兵でも驅逐することを努めねばならぬのである。唯要訣とする所は先づ我目的達成上の便否を判断し、次ぎに攻撃の難易を考慮して向ふべき方面を定むるのである。

偕て騎兵隊が山陽道以東の地區から前進するにしても、全く山陽道を開放することは出来ない。何ぜならば搜索は諸種の方面から行ふのに依りて、目的を達し得ることが多いからである。尙ほ又敵が此の方面から來らないとも限らんから、其の場合に敵を絶対に拒支し得られんまでも、逐次其の前進を遅緩せしむるだけの部隊を残して置かねばならぬ。幸にして本街道兩側に無数の溜池散在して、處々に狹隘を形成して居るから

山陽道に
對する處
置に就て

中隊長の指揮する二小隊位にても、上述の目的を達し得るであらう、又高砂方面も搜索の爲に部隊を出すことを要するのである。現在敵の歩兵部隊が居るのであるから決して忽諸に附してはならぬ。昨夜來既に前哨中隊長の手下から下士斥候を出して居るのである。上記中隊長をして、此の方面の搜索をも併せて擔任せしめたならば、指揮連繫の都合も宜いのである。

騎兵隊の前進に於ける警戒部署に就ては、混成部隊に於けると同様な要領に従つて區分するのである。併し騎兵は機動の迅速ならねばならぬ事と、兵力を集結し置かねばならぬと云ふ特性を有して居るのと、尙ほ一般搜索の爲に爲したる部署が自然に警戒の爲の有力な保障になるのによりて前衛の兵力は出來得る限り、之を節約して、本隊の兵員を多くし敵に出會するや、直に集結したる強大の兵力を以て攻撃し得るやうにせ

前進に於
ける警戒
部署に就
て

ねばならん。それであるから一、二中隊の騎兵では前衛を設けずして、直に有力な尖兵を出すのである。前衛を設くる程のものにありても、其の兵力は通常全騎兵の八分一乃至四分一である。偕て騎兵隊が前進しやうと云ふ方面は、低地にて兩側を限り、西側は多數の溜池にて野口村方面と分隔して居る。尙ほ森林にて掩蔽されて居るのである。それであるから、兩側面からは敵の急襲を受くるの顧慮は極めて鮮いのである。日岡山方面に對しては福澤及石守西方の森林に依りて展望を害するも、其の他は概ね開豁して居つて、而かも活動すべき餘地が無い。要するに敵の急襲に就ては甚しき顧慮が無いと謂ふても宜いのであらう。唯兩側から多く道路が通じて居るし。森林及溜池の堤防等の存するが爲、斥候の出没は頗る頻繁であるに相違無い。で、是等を速に驅逐し得るに足るだけの兵力を前衛とするのが必要である。であるから中隊長の指揮する二

小隊を之に充てたなら宜いのである。

昨夜來和田に居る小隊は、搜索隊の福澤附近に達するまでは、北野新田の東方に居らしめて、廣岡方向を警戒せしむるのが宜いのである。之を依然現在地に留め置くの必要は無い。又騎兵隊の前進に際して、第五中隊と連絡を取ることを忘れてはならん。以上述ぶる所に依り騎兵隊長は次ぎの如く區處するであらう。

騎兵隊長
の爲すべ
き區處

- 一、第一中隊(二小隊缺) ナシテ新在家附近ニ在リテ野口村附近ノ敵ニ對シ騎兵隊主力ノ運動ヲ掩護シ且高砂方面及其上流地區ヲ搜索セシム
- 二、第二中隊(二小隊缺) ヲ前衛トシテ六分一、向山ヲ經テ日岡山ニ向ヒテ前進シ特ニ右側ヲ警戒セシム
- 三、本隊ハ第二中隊ノ二小隊(故參中尉ナシテ指揮セシム)第三中隊

第四中隊、第一中隊ノ二小隊ノ序列ヲ以テ前衛ヨリ約八百米ヲ隔テ續行ス但シ第三中隊ヨリ將校斥候ヲ日岡山ニ、又第四中隊ヨリ下士斥候ヲ出シ岡、北山ヲ經テ城山方向ニ前進シ第五中隊ト連絡ヲ保持セシム、又昨夜來西和田ニ在ル第一中隊ノ第四小隊ヲシテ北野新田東方道路ノ集合點附近ニ到リ野口方面ニ對シテ警戒セシム

四、警戒線ハ直ニ之ヲ撤收セシム

情況

右の區處は直に口上を以て各中隊長に命令された。間も無く各隊は運動を起した。

練部屋方面の第五中隊も亦午前五時五十分に集合した。茲に中隊長は前

進を起さねばならん。

問題

第五中隊長ハ如何ニ其前進ヲ區處スルヤ

答 解

中隊の主力を以て草谷、野村の線以北から前進するのは不利である。何ぞならば敵が宗佐の高地を占領して居たなら、更に他に轉ぜねばならんからである。國包は河岸に接して低地に在るのである。敵は必ず目前に在りて瞰制せらるべき高地を棄てては置かんであらう。之に反して城山は未だ敵が占領して居ると云ふことを聞かないのである。若しも之が手に入れば遠く國包―志方道方面を展望し得べく國包附近も亦手に取る如

答解に就
ての説明

く視ゆるのである。又縦令此の高地が直に占領し得られないでも、大熊南方の高地から城山上流の河孟を十分に視透し得るのであるから、中隊の主力は草谷、野村の線以南の地區から前進するのが利益である。併し有力な斥候を草谷、相野から國包方面に前進せしむるのは必要である。何ぜなれば、之に依りて中隊の右側を警戒し得ると、尙ほ室山方面を搜索せしむるの利益があるからである。以上述ぶる所に依り、第五中隊長は次ぎの如く前進を區處するであらう。

第五中隊
の前進區
處

- 一、將校斥候ヲ草谷相野方面ヨリ國包ニ向ヒテ前進シ同地附近ヨリ上流室山附近ニ亘リ搜索セシム
- 二、將校ノ指揮スル分隊ヲ以テ尖兵トシ野谷新、上新田ヲ經テ城山ニ向ヒテ前進セシム
- 三、其他ヲ本隊トシ尖兵ノ後方適宜ノ距離ニ在リテ續行ス但シ下士

斥候ヲシテ下草谷、東條ヲ經テ前進シ中隊ノ右側ヲ警戒セシメ尙ホ一下士斥候ヲ蛸草新、上新田ヲ經テ日岡山方向ニ前進シ騎兵隊ノ主力ニ連絡ヲ取ラシム。

三月三日以後に於ける諸隊の情況

三月三日兩縦隊共午前七時前衛歩兵の先頭を以て出合及中谷を出發した途中に於て旅團長は各方面共我騎兵の壓迫に依り敵の騎兵は漸時加古川の線に向つて退却しありとの報告を受くるの外、他の情報に接しなかつた。

午前九時二十分旅團長は前衛本隊の先頭に在りて野添十字路に達した。此の時恰も騎兵隊長の午前八時四十分日岡山から發送した報告を受領した。其の要旨は次ぎの通りである。

- 一、午前八時二十分騎兵隊ハ日岡山ニ在リシ敵ノ歩兵約一中隊ヲ撃退シテ同高地ヲ占領セリ敵ハ田圃場西北方ノ渡船場ニ於テ三隻ノ渡船ニ依リ對岸ニ退却シ其諸材料ハ豫メ準備シアリシ石油ヲ注キ目下之ヲ燒燬中ナリ
- 二、平莊村上部平山及東(平山ノ西方約八百米)ニハ敵ノ監視部隊アリ又平山西方獨立標高一〇五、四高地ニハ二三ノ兵卒及將校ノ如キ者一名ヲ見ル多分展望哨ナラン
- 三、加古川町附近ニ在リシ敵ノ歩兵モ亦其對岸ニ退却セリ之ト同時ニ該地橋梁ノ水部ニ於ケル部分ヲ爆破セリ又ほうてん停車場ノ東側ニハ目下騎兵集合シツツアリ其兵力三中隊ヲ下ラサルモノノ如シ多分山陽道方面ニ行動セシ者ナラン
- 四、國包方面ヨリハ未タ報告ニ接セサルモ目下城山對岸ニ方リテ火

炎ノ揚カルヲ見ル或ハ敵ノ退却ニ使用セシ渡河材料ヲ燒燬シアルナランカ

問題

此時ニ於ケル旅團長ノ情況判斷

右答解に就ての詳説

加古川右岸の地區に於ける状態は、其の外面に張られたる幕に依りて、内部を掩蔽して居るから、容易に看破することが出来無いのである。元來内部の事柄は普通の手段を以て知り得るもので無い。而かも右岸に接して張られたる幕は頗る厚くして且強いのみならず、加古川とてふ障壁が一層の働きを爲して居る。であるから此の儘々の状態を繼續して居つ

敵状に就ての考案

たなら、何時待つたとて、之より以上の情況を知ることは出来ない。姫路―篠山道方面に行動しある將校斥候でも、決して期し得べきものでない。縦令へ此の斥候が北方から右岸の地區に潜入して、内部に於ける情況を確實に知り得たとしても、其の報告が何時に到着するであらうか、實に豫期し得べからざる事である。それであるから現在の情況を至當に判斷し、之に基いて至當に處置するの外は無い。徒らに情況の明確を希望して、多くの時間を無爲に経過したならば、或は事總て時機に後くれ臍を噛むの愚を演ずるに至らん。抑も加古川左岸に居つた敵は、最早右岸に退いたのである。さうして橋梁は之を破壊し、退却の爲に使用せし渡河材料は之を燒燬したのである。而かも渡河點とも思はるべき地點は其の右岸に於て之を監視して居るのである。國包方面は未だ其の報告に接しない、けれども左岸に居つた敵は既に右岸に退却したのに相違無い

さうして右岸の景況も固より此の方面に於けると同様であらう。斯かる情況は正さしく敵が加古川の障碍を利用して我前進を拒支せんとするか或は何れかの一地區に主力を集結し置いて、我れの半渡を攻撃せんとする企圖を有するのであらう。其の何れにした所で、旅團は黙視して止むべきものでない。勿論敵の兵力は毫も之を知らないのである。或は優勢であるかも知れん。併し優勢であるとも、又劣勢であるとも分らないものを優勢として自己が動作を拘束するのは不可である。況して敵は今尙ほ輸送中であつて、而かも昨日來の行動に鑑て、それが姫路に集合すべき全兵力の若干部分であると認められるのである。果して然らば之を加古川右岸に抑へ留めた所で我事足るので無い。のみならず我れが却て彼れに抑へ留められたのであつて、時間を費すに隨ひ、彼れは愈々其の兵力を増加し、或は其の主力が北方の地區から南下し來るかも計られんので

ある。それであるから一刻も早く前面の敵を驅逐して、姫路方面に迫らんければならぬのである。偕て此の目的を達せんが爲に差當つて起るべき問題は加古川の渡河である。河川の景況は未だ之を知悉せざるも、徒渉場無きことは明瞭である。であるから軍橋を架設せねばならぬ。之が爲には諸般の準備を要するのである。即ち各方面を偵察して架橋すべき地點を決定せねばならぬ。又技術に關しても詳細の調査を要するのである。是等偵察の爲に要する時間は決して僅少で無い。のみならず敵が對岸にて監視して居るのであるから、往々我部隊の掩護に依るにあらざれば調査し得られぬことであらう、抑も敵は盡く右岸に退却して而かも自ら橋梁を破壊したのであるから、今や我れに對して左岸に進出するの企圖を有せないことは明かである。で、困難なる敵前架橋を爲すよりは、寧ろ一部を此の方面に残し、主力を以て國包上流の地區から敵の背後に

旅團の取
るべき處
置に就て

迫らんとの考案を有する者もあらう。一應尤もの考案である。然しながら國包上流に在りても、橋梁が存するものと限らない。現在は大島及粟生に永久橋が存するやうであるが或は敵が之を破壊するかも知れぬ。否必ず破壊するであらう。何となれば眞面目に此の方面に於て防禦せんとする者が彼の方面を開放するが如き愚を爲さぬであらう。尙ほ又敵が彼の方面に一部隊を出すが如きは實に容易の筈であるから。茲に架橋しやうとした所で、矢張り敵前架橋である。斯かる覺束無き事を胸算に置いて、大切なる區處を決定するのは大なる過失である。尙ほ前面の敵は現在進出せない景況を呈して居るけれども、我動作に應じては突き出すかも知れぬのである。であるから右の如き動作は頗る危険であると謂はねばならぬ。而かも容易に渡河し得るとも認められないのである。等しく是れ敵前架橋ならば。何も態々迂廻するの必要は無い。早く準備に

着手し得る方面に於てするのが利益である。勿論現在監視しある方面に於て架橋するのは困難であるに相違無い。併し案ずるより産むが易いの諭への如く、案外輕易に出来得ることもある。之を要するに渡河すべき方面は主として戦術上の要求に由りて決定せらるるものである。而して斯かる方面は多くの場合に於て敵が嚴重に守備し、或は監視して居るのであるから、到底敵前渡河は免れんのである。

偕て前既に述べた通り、渡河に關する諸準備を完成するには、相當の時間を費さなければならん。殊に此の諸準備を爲す爲、一部隊を以て左岸に於ける要地を占領せねばならのである。而して旅團の主力を行軍縦隊の儘、道路上にも置けないのであるから、適當の位置に開進せしめねばならん。此の開進すべき位置に就ては大に熟考を要するのである。騎兵隊長の報告の如く、平山西方獨立標高一〇五、四高地に敵の展望哨あり

百

とすれば、土山、加古川町間の山陽道は全く彼れの眼下に透視せられるのである。て、此の道路を前進するのは營に不快なるのみならず、全く我主力の存在すべき方面を知られるのであつて、將來に於ける行動上に大なる不利を來すのである。であるから山陽道を前進するのは固より不可であるし、又野口村附近に集合することも避けねばならん。前衛の如き一部のものが視透かされるのは已を得ない、又左程の不利を來さないけれども主力は絶対に其位置を秘匿せねばならんから、山陽道の北方地區、即ち日岡山に依りて蔭蔽せらるべき地點に集合せしむるのが宜い。とは謂へ餘り北方に偏して、爲に南方に於て不意に起りし出来事に應ずる能はざるが如きは勿論不可である。少くも山陽道を我制下に置くべき位置であることを要するのである。即ち福澤、北野新田の中間附近を適當とするであらう。

右縦隊は特に之を招致するの必要は無い。未だ架橋方針も、渡河計畫も立たないのであるから、將來諸隊を如何に區處するかも知れんのである。殊に國包方面を開放することは出来ないものであるから、此の方面の偵察並北方に對する旅團の右側掩護を爲さしむるのが、必要である。で、其の主力を加古新村の中新田附近に集合せしむるを適當とするのであらう。又國包附近、城山、日岡山及加古川町は偵察の據點たるばかりで無く、情況の變化に際しても、是等を確實に占領しあらば主力の行動に自由を與ふることを得べきものなるを以て是非相當の抵抗力を有する部隊を以て占領せしめねばならん。又國包上流の地區も決して忽がせにすべきもので無い。微力を騎兵に委するのは過失である。差當り歩兵部隊を出だす程の必要を認めないけれども、騎兵聯隊の主力を充てなければならぬであらう。況して前面には最早騎兵部隊の行動する餘地が無いので

ある。以上述ぶる所を約記すれば次ぎの通りである。

判決

敵ハ加古川右岸ニ據リテ防禦スルナラン之カ爲旅團ハ一部ヲ以テ國包附近、城山、日岡山及加古川町ヲ占領シ主力ヲ加古新村中新田及福澤附近ニ集合シ渡河ニ關スル諸準備ヲ爲スヲ要ス

理由

加古川左岸ニ在リシ敵ハ我騎兵ノ前進ニ隨ヒ盡ク右岸ニ退却シ且橋梁及渡河材料ヲ破壊若ハ燒却シ而カモ右岸ニ接シテ部隊ヲ配置シアリ是蓋敵カ加古川ヲ利用シテ我前進ヲ拒支セントスルカ或ハ我半渡ヲ攻撃セントスルノ企圖ヲ有スルナラン其何レニアルモ旅團ハ毫モ

判決、
理由、
處置

當初ノ目的ヲ變スルノ必要ヲ認メス寧如何ナル苦難ニ處スルモ速ニ之ヲ擊攘セサルヘカラス蓋敵ハ時日ヲ經過スルニ隨ヒ愈々其兵力ヲ増加シ我攻撃愈々困難トナルノミナラス或ハ却テ北方ノ地區ヨリ壓迫ヲ受クルニ至ルヤ實ニ計ラレサルナリ

抑モ敵ヲ攻撃スルニハ先ツ大障碍タル加古川ヲ越ヘサルヘカラス而シテ其架橋スヘキ地點並渡河ニ就テノ部署ハ一ニ偵察ノ結果ニ待タサルヘカラス是加橋點ハ戰術上ノ要求ニ基クト雖技術上ニ關スル諸般ノ要求ヲモ大ニ顧慮セサルヘカラサルモノアレハナリ若夫敵前渡河ヲ危虞シテ北方ニ轉進スト言ハンカ是頗ル早計タルノミナラス彼ノ方面必スシモ無人ノ境域ヲ進ムカ如キモノニアラサルヘシ蓋敵カ此方面ヲ防禦スルニ方リ彼ノ方面ヲ顧慮セサルコト無カルヘク隨テ渡河ニ關シ此方面ニ於ケルト大差ナカルヘシ而カモ危險ノ伴フモノ

アルヲ以テ俄ニ之ヲ斷行シ得サルヘシ是故ニ差當リ一部ヲ以テ國包附近、城山、日岡山及加古川町ヲ占領シ以テ渡河ニ關スル偵察ヲ爲スト同時ニ主力ヲ敵眼ニ觸レシメサル如ク加古新村中新田及福澤附近ニ集合スルヲ至當トス

處置

一、右縱隊ヲシテ一部ヲ以テ國包附近及城山ヲ占領シ主力ヲ加古新村中新田附近ニ集合シ北方ニ對シ旅團ノ右側ヲ掩護シ且國包下西條間ニ於ケル對岸ノ情況ヲ搜索セシム

工兵小隊ヲ所屬中隊ニ復歸セシム

二、左縱隊前衛ヲシテ一部ヲ以テ日岡山及加古川町ヲ占領シ主力ヲ水足附近ニ集合シ本隊ノ開進ヲ掩護シ且下西條下流ニ於ケル對岸

ノ情況ヲ搜索セシム又特ニ一部隊ヲ高砂町ノ對岸ニ出シ同方面ヲ監視セシム

野砲兵中隊及工兵中隊ヲ旅團長ノ直轄ニ復セシム

三、工兵中隊ヲシテ攻撃ノ目的ヲ以テ國包附近ヨリ加古川町附近ニ至ル間ニ於ケル加古川ノ偵察ヲ爲サシム
騎兵一分隊ヲ屬ス

四、騎兵隊ヲシテ一部ヲ當方面ニ殘シ主力ヲ以テ國包上流ニ到リ旅團ノ右側ヲ警戒シ且右岸ノ情況ヲ搜索セシム

五、左縱隊本隊ヲシテ山陽道以北ノ道路ニ由リ福澤附近ニ開進セシム但シ架橋縦列ハ清水新田、六分一ヲ經テ西和田附近ニ到ラシム

六、大行李ハ清水附近ニ輜重ハ其先頭部隊ヲ以テ大久保ニ停止セシム

情況

右の處置は午前九時四十五分野添十字路に於て前衛司令官に口頭を以て達された。次て其の他の諸隊長へも傳騎を以て送達せられた。此の時諸隊は休止して居つたのである。時に旅團長は騎兵隊長の午前九時日岡山發報告を受領した。其の要旨は次ぎの通りである。

一、國包方面ニ出セシ騎兵中隊ノ報告ニ依レハ同地ヲ占領セシ敵(歩兵約一中隊)ハ午前八時三十分頃渡船ニテ對岸ニ退却セリ又城山ニモ敵ノ歩兵約一中隊餘占領シアリシモ我騎兵ノ前進ニ隨ヒ下西條ヨリ渡船ニテ對岸ニ退却セリ其ノ使用セシ材料ハ何レモ石油ヲ注キテ燒却セリ又對岸ノ南條ノ東端及城山北方ノ林縁ニハ鞏固ナル散兵壕ヲ築設シアリト

此方面ニ於ケル敵ノ騎兵ハ約一中隊ニシテ加古川左岸ニ沿ヒ大島方向ニ退却セリ中隊ハ一部ヲ以テ追躡シ主力ヲ以テ目下城山ヲ占領シアリ

二、ほうでん停車場東側ニ集合セシ敵ノ騎兵ハ暫時休憩ノ後神吉ニ進入シ爾後其運動ヲ認ムルコトヲ得サリシ

三、國包ヨリ下流ニ於ケル加古川ニハ徒涉場ナシ又渡船ハ一隻タモ之ヲ發見セス但シ國包及加古川町ニハ軍橋ニ應用スヘキ木材頗ル豊富ナリ

四、騎兵隊ハ山陽道方面ニ在ル中隊(一小隊缺)ヲ當方面ニ殘シ主力ヲ以テ國包上流ニ到リ右岸ノ情況ヲ搜索セントス

前衛司令官は既に命令を受け、尙ほ騎兵隊長の報告をも旅團長から示されたのである。茲に命令に基き部署を定めねばならん。

問題

前衛司令官ハ旅團長ノ命令ニ基キ如何ニ其隊ヲ部署スルヤ

答 解

前衛の占領すべき地點は旅團命令にて定められてあるのであるから、本問題の答解は極めて簡單である。唯部隊を配置するに方りて茲に注意を要するのは平山西方高地の展望哨である。縦令前衛の如き旅團の一部に在りても成し得る限り其の目視を避けるのが宜いのである。山陽道を直進したならば野口村に到るまでに、十分曝露し、殆ど兵員をも數へられるであらう。是實に不快なるのみならず我企圖を察知するの端緒ともなるのである。偕て前衛は目下尖兵を以て高畑に居るのである。さうして

前衛本隊の先頭が野添の十字路である。であるから先頭に在る部隊をして成るべく敵の展望哨の目視を避くる如く山陽道を前進して加古川町を占領せしめ。日岡山を占領すべき部隊は土山、廣ヶ澤及西和田を経て前進せしめたならば、加古川町占領部隊を除くの他は殆ど目視を避け得るであらう。

偕て日岡山は對岸の状況を觀察するに最も適當して居るのであらうし、又偵察部隊の掩護にも最も都合が宜いのである。而かも此の岸に於ける渡河掩護陣地として、十分の價值を有するのである。であるから敵眼を避け得る限り、豫め陣地を設備して置くことは必要である。歩兵一中隊位では覺束無い。少くも二中隊を要するのである。加古川町は此の地方に於ける唯一の市街であつて、而かも上流地方から物資の集まる所である。軍需諸品殊に軍橋に利用すべき木材の如きも勿論豊富であるに相違

第一線に
配置すべ
き兵力に
就て

無い。随つて軍需諸品を蒐集する等の爲部隊の出入も頻繁であるから、之を確實に掩護せねばならん。であるから是亦歩兵二中隊位を要するのであらう。唯高砂町の對岸は左程の顧慮を要せないのであらう、併し永久橋も存して居るから敵の騎兵が進入せんとも限らない。て、之を騎兵に任して置いては確實でないから、敵の一兵をも入れないだけの歩兵部隊を出して置かねばならん。で、加古川町を占領する部隊から一小隊を高砂町の對岸樋口附近に出して置いたら宜い。尙ほ若干の監視兵を稻屋及友澤に出して騎兵と相待つて、對岸を監視せしめたら十分であらう。

- 一、前兵大隊(第一大隊本部並二中隊騎兵一分隊)ヲシテ成ルヘク敵眼ヲ避ケツツ山陽道ヲ前進シ加古川町ヲ占領シ同所附近ヨリ下流ニ於ケル對岸ノ情況ヲ搜索セシム但シ歩兵一小隊ヲ樋口附近ニ出シ高砂町方面ヲ監視セシム

旅團長の
命令に基
く前衛の
部署

二、第二大隊（一中隊缺）ヲシテ土山、廣ヶ澤及西和田ヲ經テ前進シ
 日岡山ヲ占領シ上部附近ヨリ升田新ニ亘ル方面ノ情況ヲ搜索セシ
 ム

三、其他ノ諸隊ハ第二大隊ニ續行シ水足東側ノ乾田ニ集合セシム但
 シ騎兵小隊（二分隊缺）ハ山陽道方面ノ騎兵中隊ト共ニ行動セシム

情況

前衛司令官は右の區處に關して直に命令された。各部隊は各々所命の地
 點に向つて前進を起した。前衛司令官は日岡山を占領すべき第二大隊に
 續行した。旅團長も亦幕僚及野砲兵大隊長を隨へて前衛の主力の後尾に
 續いて前進を起した。

工兵中隊長は野添十字路にて旅團長から河川偵察の命令を受けたのであ

る。成るべく早く此の任務を遂げなければならんことは言ふまでも無い
 ことである。

問題

工兵中隊長ハ如何ニシテ河川ノ偵察ヲ實行セントスルヤ

答 解

國包から下流に於ける加古川の長さは、之を直線上に測るも十二吉米内
 外である。斯かる長き間を一人の將校にて偵察せんとしても決して數時
 間に仕遂げ得るものでない。河線の状態を見るのみならばいざ知らず、
 苟も渡河の目的を以て偵察するならば、兩岸の景況は勿論、水幅、流速
 河底の性質等、其他戰術上に屬する事項までも一々調査をせねばなら

答解に就
 ての説明

ん。實に容易の業で無い。況して對岸に近く敵の監視部隊が居るのであるから、強き妨害を受くることを覺悟せねばならぬのである。工兵中隊長は旅團に於ける唯一の工兵指揮官である。此の場合に於ける工兵は實に重大なる任務を負擔して居るのである。攻撃の成功は一に懸つて工兵の雙肩に在ると謂ふも過言で無からう。

偕て之が偵察を爲すに方りて、旅團長から意圖を示されて居るに相違無い。併し此の場合に於ける意圖は決して的確に定まつたもので無からう、て、工兵中隊長は先づ全般の上に戦術眼を注がねばならん。否らざれば或は不要の地點に於ける偵察を詳密にし、緊要の地點に於て却て粗なるが如き失態を來すかも知れぬのである。抑も高砂方面は既に屢々述べた通り、戦術上重要視すべき價値が無いのである。之に反して國包、加古川町間は旅團の主として行動すべき地域であつて。自然渡河も此の方面

に限りられるのであらう。勿論何れより主力を渡河せしむるかは、目下之を決定し得べからざることである。であるから、國包方面も加古川町方面も其の何れから主力が突き出すにも妨げ無きやうに十分周密に偵察せねばならん。唯高砂町の上下流は架橋點を偵察するの必要は無い、又河川の性質から考へても恐らく短時間に軍橋を架設し得べき要件を備へて居らんであらう。されば工兵指揮官たるものは先づ全線に就て要否の度を考へ之を適當に區分して、各々之に將校を充て偵察せしむるのである。で、中隊長は差當り右縦隊に屬せし工兵小隊長に命令を送達して、國包附近から下西條附近に亘る間に於て架橋點を偵察せしめ、尙ほ一將校をして鐵道橋附近から永久橋の下流に亘り、中隊長自らは日岡山附近から中津に亘る間を偵察することとなるであらう。若しも中隊長にして餘裕あるならば更らに城山附近を偵察することは勿論である。

- 一、右縦隊ニ屬セシ工兵小隊長ヲシテ國包附近ヨリ下西條附近ニ亘ル間ニ於テ架橋點ノ偵察並國包ニ於ケル架橋材料ノ偵察及蒐集ニ從事セシム
- 二、將校ニ下士兵卒若干ヲ附シ前兵大隊ニ續行シ加古川鐵道橋附近ヨリ西河原附近ニ亘ル間ニ於テ架橋點並其下流ニ於ケル狀態ヲ偵察セシム
- 三、特務曹長ニ若干ノ下士兵卒ヲ附シ加古川町ニ到リ同地ニ於ケル架橋材料ノ偵察及蒐集ニ從事セシム
- 四、中隊長ハ所要ノ人員ヲ從へ歩兵第一聯隊第二大隊ニ續行シ日岡山附近ヨリ中津ニ亘ル間ヲ偵察ス
- 五、中隊ノ殘餘ハ將校ニ引率セシメ歩兵第一聯隊第二大隊ノ後尾ニ續行シ日岡山南麓ニ到ラシム

情 況

午前十一時三十分から午後十二時二十分に亘り前衛は總て所命の如く配置を終つた。各部隊は注意に注意を加へて動作したから、對岸の監視兵から一發の射撃をも受けなかつたのである。右縦隊に在りても此の時既に配置を終つて居つた。其の大體は左の通りである。

- 一、歩兵第二聯隊第三中隊は主力を宗佐村の高地上に置き、一分隊を同高地北端に、一小隊を國包に、又一分隊を船岡の北方に出して居る。
- 二、大隊長の指揮する二中隊を以て城山を占領し其の一部は下西條の北端を占領して居る。
- 三、騎兵小隊は所要の傳騎を残し、河川各部を監視せしめ、其の主

力は他の諸隊と共に中新田北側の乾田に集合して居る。又中新田から宗佐及城山に電話線を架設して居る。

前衛も日岡山、水足及加古川町の間には電話線を架設した。尙ほ線を城山に延長せむとして目下作業中である。

午後十二時十分以來旅團長は日岡山に在りて各方面を観察して居る。午後一時に至り本隊の諸隊は總て福澤附近に集合した。旅團電話隊は日岡山、福澤、中新田及檜山(三木町西北方約四吉米)間に電話網を架設中である。暫時の後には開通するに至る筈である。

此の時に至るも敵狀には毫も變化無い。偵察の工兵將校は何れも努力して居る。併し堤防以内に入れば、縦令一人であつても忽ち對岸から狙撃せられ或は一分隊位の集團火を受けて。長く停止することが出来ない。それが爲餘程困難して居る模様である。

騎兵隊は今朝日岡山を占領せし以來同地に在りて搜索に従事して居つた。午前十時三十分旅團命令に接した。そこで聯隊長は下士斥候を残して置いて三軒屋に到り、同地にて第五中隊を合し、午前十一時二十分更に同地を出發し、花尻を経て午後十二時三十分檜山に到着した。此の時我第五中隊の一部は太郎大夫の西端に在りて敵の騎兵約五六十と相對して居た。我前衛が太郎大夫に進入するや敵は對岸に退却し、且橋梁の中央部から右岸に亘る部分を爆破した。次で北方に方りて爆聲を聞いた。多分栗生の橋梁を爆破せしならんと察せられたのである。そこで騎兵は一先づ小野に停止して河川の偵察並對岸の情況を搜索することに決心して、小野に向つて前進した。但し一下士を檜山に残し電話開通を待つて右の情況を旅團長に報告せしむべく命じた。

午後一時騎兵隊前衛の先頭小野の北端に達した。此の時敵の騎兵三名鹿

野附近を徘徊して居つた。前衛の一部は之を捕獲せんとて直に本道を北に向つて前進した。鹿野の東南二つ池に達したる際は既に其の姿を見失ふた。我部隊は一層速力を早めて本道を前進した。古川に達したる際、恰も敵は中古瀬から大門に向つて疾驅して居つた。で、我部隊は大に落膽した。然るに意外にも大門の東端から我騎兵と思ほしきもの五六名許り顯出して敵の退路を塞いだ。之に勇まされて我部隊は更に追躡した。終に其の二名を捕獲したが、一名は北方に逸走し去つた。そこで二名を拉して小野に引上げた。

大門には昨日來此の方面に行動せし我將校斥候が對岸に在る敵の騎兵と對して居る。此の騎兵は今朝粟生の橋梁を渡つて中野に到り、一先づ茲に停止して斥候を北條、小原及高畑方面に出した、然るに午前十一時頃高畑方面から敵の騎兵一中隊許顯出して、之に追ひまくられ終に午後十

二時四十分頃大門に逃げ込み該地にて敵を阻止した。爾來敵と對峙して今に至つたのである。先きに大門から出でし五六名は此の部隊に屬するものである。

旅團長は依然日岡山に居る。さうして敵の騎兵が大島及粟生の橋梁を爆破したこと並騎兵隊の目下主力を以て小野に停止し河川の偵察及對岸の情況を搜索して居ることも報告によりて詳知して居る。午後二時四十分騎兵隊長から電話にての報告を受けた。此の報告は騎兵隊長の希望により幕僚の一人が聽取りて筆記したのである。

午後一時二十分頃大門の東南方に於て敵の騎兵二名を捕獲した。取敢へず之に就て調査せしが、當初は二人とも口を噤んで容易に語らざりしも或は之を脅し或は之を勞りたので漸く次の事を語つた。其の語る所は二人とも符合して居るから或は眞實ならんと思はる。

一、昨日來前面ニ在リテ我ニ對セシ敵ノ騎兵ハ四中隊ヨリ成ル一聯隊ニシテ第五聯隊ナリ又此騎兵ハ去ル一日正午ヨリ二日朝ニ亘リ姫路ニ到着セルモノニシテ二日午前八時三十分姫路ヲ出發シ一中隊ハ姫路―國包道ヲ他ハ山陽道ヲ前進シタリ

二、敵ノ輸送開始ハ其幾日ナルカヲ知り得サルモ右騎兵ノ到着前既ニ步兵ノ一團隊到着シアリト謂フ其兵力ヲ語ラサルモ彼等ノ述フル諸種ノ事項ヲ綜合スレハ凡ソ一聯隊位ト考察セラレ得ヘシ

以上の外は何事も推察することを得ない、又語る所も信ずるに足らない。又捕虜は只今護衛を附して成るべく早き歩度を取りて到るべく、貴司令部に向け出發せしめたから、程無く到着するであらう。到着の上は更に十分に糺問せられたし。尙ほ右の報告は筆記して送り出して居る念の爲申上ぐる。

右の報告の外昨日來小野方面に行動して居つた將校斥候の大門に引き退いた事をも報告されたのである。

午後二時五十五分、敵の歩兵縱隊魚橋より辻村に進入した、其の兵力は確かに一大隊である。旅團長自らも之を視たのである。

偵察に任せし各工兵將校は何れも敵から甚しき妨害を受けて頗る苦辛し或は若干の兵卒を或る地點に露はして敵の注視を引き、其の間に乘じて觀察を遂げ、或は我歩兵部隊の掩護射撃の下に辛じて動作する等諸種の手段を講じて終に午後二時三十分乃至三時に至りて偵察を了へたのである。茲に是等の報告及他の偵察せし事項を綜合すれば次ぎの通りである

其一 河川ニ就テ

一、國包及其上流ハ水部著シク左岸ノ堤防ニ接シ空地ヲ有セス其下流約二百米ニ在リテハ河幅狹窄シテ僅ニ五十五米トナリ水深約一

米六十、流速一米五十、河底ハ小ナル石塊トス而シテ兩岸ニハ十分廣キ空地ヲ存セリ

二、中西條ヨリ都染ニ通スル渡船場及其附近ハ河幅百二十乃至百米ニシテ水深二米二十、流速一米三十、河底ハ礫石トス兩岸ニハ廣キ空地ヲ存シ殊ニ右岸ニ於ケル森林ハ架橋作業ヲ蔭蔽スルノ利アリ

右渡船場ノ下流ニ於ケル水潦ハ其中央部約四十米間破壊シアル爲ニ徒涉スルコトヲ得ス又之ヲ修理スルニハ夥多ノ時間ト勞力トヲ要スルヲ以テ現時ノ情況ニ對シテハ全ク不可能ト謂ハサルヘカラス

三、下西條渡船場及其上流ハ河幅百米乃至六十米、水深二米十乃至一米三十、流速一米二十乃至一米、河底ハ砂礫トス左岸ニ於ケル堤

防ト水部トノ間ニハ二十米乃至三十五米ノ空地ヲ存セリ又堤防ニ接シテ松樹並列シアルモ作業ノ妨害トナラス、上流ノ河幅狹窄セル部分ハ空地稍々狭ク多少作業ニ不便ヲ感スルモ支流及中洲（支流ト本流トニテ形成スルモノ）ハ作業上ニ大ナル便ヲ與フ又此支流ハ幅三十米餘ニシテ水深僅ニ六十珊米ニ過キス流速モ亦八十珊米ニシテ河底ハ細砂ナリ

四、下西條ヨリ養老ニ通スル渡船場附近ハ河幅五十米、水深二米五十、流速一米二十、河底ハ砂礫トス而シテ渡船場附近ハ左岸ニ空地ヲ缺クモ其下流ニ至レハ廣キ草地ヲ有セリ

五、上部附近ヨリ上流ハ潮汐ノ影響ヲ受ケサルモ其下流ハ影響ヲ受ケ殊ニ西河原ノ稍々下流マテハ昇潮時ニ於テ逆流ヲ爲ス

六、田圃條ヨリ池尻ニ通スル渡船場及其上流ハ河幅百二十米乃至九

十米ニシテ水深ハ干潮時ニ於テ一米七十乃至一米二十五、滿潮時ニ於テ二米三十乃至一米七十五、流速干潮時ニ於テ一米、河底ハ砂礫トス、渡船場ノ上流及二塚ノ西方ニハ水部ニ接シテ空地ヲ存スルモ他ハ殆ト空地ナシ

七、中津附近ハ河幅九十米乃至七十米ニシテ水深ハ干潮時ニ於テ二米四十乃至二米、流速一米、河底ハ砂礫トス中洲ヨリ下流約六百米間ハ水部ト堤防トノ間ニ幅五六十米ノ空地ヲ存シ且堤防ニ接シテ松樹並列シアリ

八、鐵道橋ヨリ永久橋附近ニ至ル間ハ河幅九十米乃至八十米ニシテ水深ハ干潮時ニ於テ一米八十乃至二米、滿潮時ニ於テ三米六十乃至三米八十、流速干潮時ニ於テ七十珊米、河底ハ細砂ナリ
加古川町ノ下流ハ一般ニ深クシテ四米乃至三米河底ハ泥土ナリ

九、三日ニ於ケル潮汐滿干ノ時刻ハ滿潮午前六時四十五分干潮午後二時五十三分及滿潮午後八時二十二分干潮四日午前二時三十五分トス

其二、兩岸ノ地形ニ就テ

一、城山ニハ平莊村方面ニ對シテ野砲兵二中隊分ノ陣地ヲ、呂岡山ニハ西方及西北方ニ對シテ野砲兵三中隊分ノ陣地ヲ有ス
福澤ヨリ石守ヲ經テ大野ニ通スル道路及水足、大野新ヲ經テ田圃條ニ通スル道路ハ共ニ野砲ヲ通スルコトヲ得大野ヨリ西之山ヲ經テ下西條ニ通スルモノモ同様ナリ

二、水田ハ總テ麥畑ニシテ而カモ能ク乾燥シ道路構築容易ナリ又縱横ニ流ルル浣漑溝ハ水鮮ク到ル所徒渉スルコトヲ得

三、加古川左岸ノ堤防ハ高二米乃至一米六十ニシテ上幅二米餘ナリ

右岸ニ於ケル河積中ノ堤防ハ高サ概シテ一米餘ニシテ上幅モ一米以下ニ過キス船頭ヨリ東(部落ノ名)ニ通スル堤道ハ高サ二米位ニシテ上幅モ四米餘ト認メラル

四、中西條北方右岸ノ森林ハ密ニシテ通視ヲ妨ケ其高サモ十四五米ナリ、藥栗北方ノ高地ハ十四五米ノ高サヲ有スル松樹ヲ以テ覆ハレ其斜面ノ傾斜モ急ニシテ軍隊ノ運動甚シク困難ナラント認メラル

五、獨立標高一〇五、四高地ハ一般ニ十四五米以上ノ松樹茂生シ且南方斜面ハ頗ル急峻ニシテ單獨ノ歩兵ト雖昇降頗ル困難ナラント認メラル、西脇東方高地ノ西斜面ハ多少緩ニシテ且松樹繁茂シアルモ一般ニ倭小ナリ

其三 架橋應用材料ニ就テ

一、國包ニハ材木商三戸アリ各々夥多ノ木材ヲ有シ其架橋ニ應用シ得ヘキ杉ノ本口三寸乃至五寸ノ中徑ヲ有スル丸太及長サ六尺、厚サ一寸、幅六寸乃至一尺ノ松板並三寸乃至五寸角ノ柱材(長サ二間乃至三間)何レモ豊富ニシテ慥カニ三個ノ橋梁ヲ架設スルニ足ルヘシ但シ鐵線、綱、鋸ノ類ハ鮮クシテ一橋梁ノ爲ニモ他ヨリ求メサルヘカラス

二、加古川町ニハ材木問屋數戸及製材所アリ何レモ夥多ノ材木ヲ有ス殊ニ同地停車場近傍ノ倉庫ニ架橋ニ應用シ得ヘキ杉丸太(本口三寸乃至五寸ノ中徑)三寸乃至五寸角ノ柱材六寸乃至一尺幅厚一寸乃至一寸五分ノ松板等二箇處ニ收藏シ其員數ヲ算スルニ暇アラズ又金物商モ數戸アリ鐵線、釘、鋸ノ類頗ル豊富ナリ

三、渡船ハ一隻タモ之ヲ發見セス

問題

午後三時ニ於ケル旅團長ノ決心

右答解に就ての詳説

捕虜の言は固より之を信ずるに足らないのであらう。併し昨日來の情況から推して、之を信ぜざらんと欲するも、信ぜざる能はざる所である。蓋三月一日正午以前に於て、既に行動し得べき諸兵種の一團隊を姫路に集め得たならば、安ぞ二日の午後を待つて始めて加古川左岸に進出せしが如き緩慢なる情況を顯はさんや。加古川と姫路とは相距る僅に三里餘に過ぎないのである。其の集合を掩護する爲にも成るべく遠く東方に在

敵狀に就
ての考察

りて行動するのが利益である。又戰術上からも勿論要求せざるべからざる事である。然るに此の舉に出てないのであるから、之を捕虜の語る所に對照したならば、正さにそれが眞實であるに相違無いと想へられるのである。て、二日朝以來續て加古川右岸の地區に到着しあることは固より疑ふべくもあらず、現に歩兵大隊の魚橋から辻村に進出したのも矢張り姫路から來たものに相違無い。それであるから、少くも歩兵旅團に他兵種を混じたるものが到着して居ることを豫想せねばならんであらう。偕て此の敵が直接加古川の地障に固着して、我渡河を妨害せんとするか或は主力を一地に集めて置いて、攻勢的動作に出でんとするか、是固より確知することは出來ないのであらう。併し直接河川に固着するならば對岸の各地に於て現在よりも尙ほ多數の守備兵而かも相當の工事を見られんければならん筈である。それにも拘はらず僅に監視部隊を配置し在

るに過ぎないのであるから、或は我半渡に乗せんとするの企圖を有て居るのであるまいかと判断し得るのである。で、此の判断に基いて我攻撃を區處せねばならん。而して若しも敵が全力を擧げて河川に固着して居つたならば、これを却て我れの幸福である。何ぜならば廣き正面であるから、何れかの一點を破ることは比較的容易であつて、而かも一點を破れば、他は勞せずして驅逐し得るからである。

偕て之が攻撃の區處に就ては大に研究を要するのである。河川の狀態は既に詳知して居る。難易こそあれ何れの方面でも架橋し得べき數個の場處を存して居る。それであるから渡河の爲に拘束せらるることは毫も無い。唯だ一に戰術上の利益を考慮すれば宜いのである。抑も敵が攻勢的動作を爲す爲に何れに主力を集結し在るであらうか、蓋此の位置は平莊村及東神吉村方面の何れにも容易に進出し得べき場處であらう。即ち志

渡河に關
する區處
に就ての
研究

方の南方と推測し得るのである。そこで旅團が何れの方面に向つた所で渡河の妨害を受けない筈も無ければ又敵の意表に出づることも容易に出來得ると考へられないのであらう。であるから一方面にのみ向ふのは不成功の基である。否寧ろ戰術上の過失と謂はねばならん。凡そ一陣地を攻撃しても必ず助攻に依りて敵の一部を牽制するか或は脅威して、他の部分に本攻を施すのである。平等に兵力を撒布して平押しに押し立てるは、多くの場合に於て適當しないのである。殊に對岸の敵を攻撃するには右の區處を必要とするのである。若しも一方面にのみ向はんか、敵は其の集結したる全部を擧げて我れに抗するのである。而かも敵は他の方面に何等の顧慮を持たないから愈々安心して我半渡の鼻前に鐵槌を振揚ぐるのである。此に至つて成功を希望したとて最早我事去矣である。若しも此の際他の方面から敵の一側を刺衝することあらんか、敵の我れに

加ふる壓力も自然に緩和し、我れは此の際に乗じて全力を渡し十分の兵力を展開し得るから、少くも戦況を變ずるに至るであらう。若しも當初から數方面に向つたなら、敵は何れが我主力なるを知る能はず、随つて何れの部分にも相當の兵力を向けなければならぬやうに至るから、我主力の動作も比較的容易であつて而かも成功の見込愈々確實となるのである。それであるから旅團は是非平莊村及東神吉村の兩方面に向かはなければならぬ。是に於てか何れの方面に主力を持ち行くべきやの問題を生ずるのである。抑も敵の主力の位置を志方の南方とすれば、其の平莊村方面に進出するに、狭き隘路を一縦隊にて通過しなければならぬ。尙ほ國包方面は河川我方に入り込んで居るから我渡河の爲にも比較的容易である、であるから主力を以て此の方面に向ふのが利益であると論ずる者がある。一應尤もの論である、固より敵の進出も幾らか困難であらう

又渡河の爲にも我れに多少の利益を與へて居る。是等は慥かに此の方面に附隨する利益であるに相違無い。けれども只此の利益のみを知りて、此の方面に伴ふ不利に想ひ到らぬのは、研究の足りないのを惜まなければならぬのである。凡ろ一地に於て防禦を爲さんとする者は必ず其の配備を研究すると同時に身を攻者の位置に於て其の攻撃の方法を研究するものである。若しも攻者に特種の利益を呈して居つたなら、防者は必ず之に着意して居るに相違無い。であるから、攻者は單に自己に屬する利益のみを看破したばかりでは決して足れりとせないのである。必ずしも此の利益を終始保持せられ得べきや否を深く研究せねばならぬのである。平莊村方面に主力を持ち行くに就て第一に着意せねばならぬのは、小畑東北方の高地から小畑を経て其の西南方高地に亘る線である。此の陣地は前地が大に開豁して居るばかりで無く、權現川の障碍を控へて正面を

堅固にして居る。勿論權現川の狀態を委しく知つて居るのでは無い、けれども敵前近くに、三四十米の河幅を以て横斷して居るのであるから、徒渉し得た所で容易では無い。況して徒渉が困難であつたなら、茲に攻撃の大頓挫を來すのである。又兩翼は高地だけそれだけ鞏固であるに相違無い、而かも地形上包圍的動作を爲すことは容易で無い。尙ほ又兩側は高地にて限られ大部隊の運動頗る窮屈である。斯かる陣地であるから敵が一部を以て占領して居たなら、縱令へ我主力を以て之に向ふも短時間之を撃破することを得ないであらう。即ち攻撃に一頓挫を來すのである。此の間に敵が主力を以て東神吉村方面に於ける我れの一部に攻撃し來らば、固より少時間之を抗拒し得るに相違無きも、漸次に壓迫せられ終に敗退するに至るであらう。情況一たび此に至つたなら、我主力が尙ほ攻勢力を有して居つても最早全般の敗退に歸するのである。是が所

謂平莊村方面に附隨する所の、當然受くべき我れの不利である。而かも此の不利は實に運命の繋かる所であつて、些細の利益に換へることの出來ないものである。勿論敵は上述の如くするとも限らん、又せないかも知れん。若しも敵が東神吉村方面に於ける我一部に主力を向けて、平莊村方面を全然開放して居つたなら、それこそ實に僥倖と謂ふの外は無い然しながら僥倖は所謂僥倖であつて豫め期することを得ないのである。蓋しながら僥倖は戰術で無からう、戰術は道理の上から割り出された運用である。苟も戰鬪を指導せんとする者は僥倖を胸算に置いてはならぬ。既に今日の正午以來河川こそ隔だつて居れ近く敵と相對して居るのである。此の際全く敵の意表に出づるとか、或は全く之を欺き得るとか言ふ事は望んだ所で得難いのであらう。敵が全般の地形を至當に考察したならば、其の動作も亦至當に實行せられるのである。それであるから我主力を以て

平莊村方面に向ふのは危険である。敢て危険を犯さなければ目的を達し得られんと謂ふ情況でも無い、又此の危険を犯せばとて奏功の結果が偉大であると謂ふべき事も無い。要するに平莊村方面に主力を向けやうと言ふのは豫想する敵の主力に遠かつて渡河し得ると云ふ一利益を頼むに歸するのである。而かも敵の監視部隊は右岸に近く配置されて居るから何れの部分とて渡河の困難の度は同様であらう。翻つて東神吉村方面の地形を観察せよ。平莊村方面に於けるが如く窮屈なる地形でないことは言ふまでも無い。而して渡河中敵の攻撃を受けた所で、舛田、出河原の如き或は西脇、砂部の如き何れも渡河せし部隊が據つて以て拒支するに足るべき據點を供へて居るから、縦令へ優勢の敵に對しても瞬時の間に撃破せられることもあるまい。勿論此の方面は敵の注意する所も平莊村方面に比して嚴重であるに相違無からう。又其の覺悟を以て當らんければ

ならんのである。ろこで渡河に關し至大の考慮を以て計畫を定めねばならん必要を生ずるのである。若しも敵を欺騙し得るか或は敵の意表に出得ると定まつたなら、周到なる計畫も、機敏なる動作も要しないのである。河川は攻防兩者の運動及搜索を困難ならしむると云ふ特性を有して居るから、攻者は敵の意表に出ることも出来るし又欺騙することも出来るると謂ふのであつて。欺騙し若は意表に出でなかつたなら攻撃が出来ないと謂ふので無い。攻者は常に敵の妨害を制壓して渡河するの意思を有つて居らねばならん。之を要するに、渡河し得たからとて直に敵の爲に拒支せられて攻撃に大頓挫を來すやうな所は縦令へ渡河が比較的容易であつても主力を向けるのは不利である。渡河後に於て有利に戦闘し得べき方面は多少渡河の困難を忍んでも主力を持ち行くのが至當である。況して渡河の困難は周到なる計畫に依りて多少補ひ得るのである。うれ

であるから此の場合に在りて旅團は右縦隊に屬する諸隊を擧げて平莊村方面に向はしめて敵を此の方面に牽制し、主力を以て東神吉村方面に進出するのが至當であらう。若しも敵が主力を平莊村に向けたなら我れは却て至大の幸福である。即ち牽制部隊は愈々其の目的を達したのであつて、主力の總ての動作は愈々容易となるのである。之が爲牽制部隊が四苦八苦の難境に瀕しても、毫も憂ふ所は無い。それが愈々長ければ、長き程奏功の結果が偉大である。

決心

旅團長の
決心

旅團ハ右縦隊ニ屬スル諸隊ヲ以テ平莊村ニ、主力ヲ以テ東神吉村方面ニ進出シテ敵ヲ攻撃セントス

處置

省略(次ノ問題ニ於テ自ラ研究シ得ヘシ)

問題

右ノ決心ヲ實行スル爲ノ渡河計畫

右答解に就ての詳説

旅團長が其の決心を斷行するに就て先づ第一着に架橋せねばならん。而して之に關する詳細の偵察は既に終つて、架橋し得る地點は盡く報告されてある。で、此の各地點の内から適當したるものを選定すれば宜い。凡て架橋點に具備すべき要件は鮮く無いのである。併し何れの地點でも決して完全に具備して居るものでない。若干の缺點あるは免れないのであ

架橋點に
就ての研
究

る。それが現時の情況に妨げなければ之を以て満足しなければならん。偕て國包の下流河幅狹窄したる部分は兩岸共に大なる道路に接近して居つて、且作業上にも至大の便を有して居る、けれども敵が工事を施しある南條に接近して居るから、若しも敵が之に據つて居つたなら、絶対に之を驅逐した後でなければ作業に従事することを得ない、而して之を驅逐する爲には他の點から渡河して攻撃せねばならん、而かも短少の時間に奏功するや否や實に覺束無い。要するに一定の時間内に架橋し得るの見込が無いのである。中西條より都染に通ずる渡船場附近は直接に道路も通じて居るし、數多の要件をも具へて居る、けれども是亦都染に接近して居つて、敵から甚しき妨害を受くべき虞れがある。のみならず河幅も比較的廣いから、それだけ多くの時間を要するのである。他に無くんば兎も角、好んで採用すべき場處で無からう。

下西條の渡船場附近は水深稍く深きに過ぐるも、敵に對する顧慮は前二者に比して鮮少である。又其の上流は河幅狭く且水深も二米以下にして作業の便を有して居る。只茶屋條の附近から橋梁まで、城山の脚に沿ふて道路を構築せねばならん、けれども平莊村方面に動作する部隊の爲には此の渡河點を措いて他に求め得られないであらう。而して上流のものは河幅も狭く泛水の便利をも有して居るから、縱令へ道路を構築しても茲に選定するのが宜いであらう。又下西條より養老に通ずる渡船場は總ての點に於て良好であるけれども、水深の關係上浮淤橋脚にあらざれば架設困難の爲夥多の時間を要するの不利がある。尙ほ比較的敵方に凸入して居つて、此の附近に於ける監視部隊の主力でも居らうと想はるる養老を近く前に控へて居るし、尙ほ其の北方の堤防は監視部隊の良據點を形成して居るから、容易に架橋し得られないかも知れのである。併し

架橋點とせないまでも、渡河の爲に利用すべき場處であるから情況之を許す時機に至つたならば直に適當の方法を以て軍隊を渡すべき考案を定め置くことが必要である。斯かる河幅の狭き部分は何種の渡河法でも短時間に多くの軍隊を渡し得るの利益がある。

日岡山附近は對岸の地形並主力の展開すべき方面に關して全く架橋點に適當しない。是一には池尻の如き平山の如き何れも強固なる障地を形成して居るから自然多くの兵力を吸引せらるるの虞あると一には東神吉村方面に出べき軍隊が河流に近く沿ふて長く側方行進を爲さねばならんからである。

中津附近の架橋點も展開すべき方面に關し幾分か東方に偏するの嫌なきにあらず、又東(部落の名)及出河原の如き或は其の中間堤道の如きは共に監視部隊が據つて以て我れに妨害を加ふるに適當して居るやうである。

けれども東の如きは其の南側に竹藪ありて南方の通視を遮つて居るし、又我部隊にして東を占領せば、中間堤道の敵は自ら退却すべく、而して出河原の如きは架橋作業に對して敢て意とするに足らないのである。而かも主力の爲には此の架橋點を措て他に求め得られないのであるから、其の附隨する所の缺點は他の方法を以て之を補ひ、必ず完成を期せなければならぬのである。

鐵道橋附近は河川の性質上速成を要すべき軍橋架設に適せない、然れども補助渡河の爲には固より利用せねばならぬ。殊に我岸に存する支流の如きは準備作業を爲すに頗る適當して居る。又鐵道橋も適時之を利用するの考案を定め置かねばならぬ。材木の豊富なる場合に在りては如何なる施設をも爲し得るのであるから、完全に準備しあらば、短時間に通過し得べき設備を爲すことは決して困難なる事業ではあるまい。之を要す

るに此の方面は主力の渡河すべき緊要の部分であつて、敵から受くる妨害も劇烈であると覺悟せねばならん。随つて有らゆる手段を盡して短時間に多くの軍隊を渡すことを計らんければならん。此の方面に於ける渡河設備の完否は全く旅團の運命の懸る所である。

架橋材料
の選定に
就て

凡て敵前に於ける架橋に在りては主として縦列材料を使用せられるのである。是最も靜肅に架設し得るからである。併し一縦列の材料とて左程多數を有するもので無いから、長さ百米内外の橋梁二個を架設することは固より困難であらう。而して混成旅團からの兵力を渡すには唯一條の橋梁では不足でもあらうし、而かも掩護隊は勿論架橋作業中でも一部の軍隊を漕渡に依りて絶へず渡すことも必要である。然るに他の架橋に應用すべき材料は豊富であつても、小舟は一隻たも無いのであるから、自然縦列材料のものを使用せねばならん。又潮汐の影響を受くる場處では其

の干満の差が大なれば大なる程困難の度を増すのである。若し浮淤橋脚を使用する場合に在りては其の兩岸に接する橋節の處で特別の装置を施さなかつたならば破壊せらるるの虞がある。若しも三尺以上の干満の差あるときは、縦令へ何等かの装置を爲しても四米の張間を有する軍橋では最早維持し難いのである。であるから中津附近に在りても既に縦列材料を使用するに適せないのである。已を得ざるも應用材料に依らんければならん。應用材料に在りても、適當したる木材を有して、十分に準備し得たならば比較的時間を費さないで出来るのである。蓋適當なる材料を有する場合は成るべく縦列材料を使用しないのが宜いのであらう。けれども茲に熟考せねばならんことがある。それは架設に要する人員である。工兵は僅に一中隊を有するに過ぎない。應用材料を以て十分に準備しやうとしても、工兵の全員を之に使用することは出来ない。漕渡の

爲にも鮮からざる人員を要するのである。何れにしても鐵舟を使用せねばならぬのであるから、架設し得べき場處には縦列材料を使用するのが利益である。然し之が爲多數の鐵舟を要するやうでは固より不利であるが、幸にして城山方面に於ける下西條渡船場の上流は河幅も狭し又泛水の便もあるから此處に縦列材料を使用するのが利益である。茶屋條から軍橋に至るまでの道路の如きは已を得ざれば歩兵にても開通し得るのである。必ずしも工兵でなければならぬと云ふことは無い。

偕て應用材料を使用するに就ては、成るべく架設の時間を鮮くすること
を努めねばならぬ。橋脚を立柱とするが如きは恐らく敵前に於て爲し得
べからんであらう。豫め必要なる數だけの橋脚を構造して置いて、恰も縦
列材料を以てするが如く、間斷無く圓滿に架設するやうにせねばならぬ
之が爲には冠材、脚材、繫材等より成る木桿製架柱を選り用するのが宜い。

應用材料
を以てす
る架橋に
就て

尤も此の種の橋梁は流勢が急であつて、水深大なる河川には設置困難である。併し中津附近では流勢、急でも無ければ又幸に干潮時に架設するのであるから頗る容易であらう。又材料も脚材の爲本口三寸乃至五寸の杉丸太を使用せば取扱も困難で無く、縦隊橋として其の負擔に耐ふる十分の強度を有するのである。是等の橋脚は中津に於て構造すれば便利であるけれども、夜間にあらざれば材料の運搬を敵に見らるるの不利があるから、寧ろ材料の現存せる停車場の附近に於て構造するのが宜い。偕て河幅は九十米である而して張間は五米と爲し得るのであるから橋脚の數は十八個を要す、之に若干の豫備を入れて二十四五個も構製すれば宜いのである。

鐵道橋に軍隊の通過すべき設備を爲すには、鐵道に關する諸件を知らねばならぬ。偕て軌條の高さは十珊八即ち約三寸六分にして枕材上右の高

鐵道橋に
歩兵を通
過し得る
設備に就
て

さに頭部を靜定して居る。又軌間の幅は三呎六吋即約三尺五寸四分にして之に兩軌條底部の幅(十珊八即ち約三寸六分)を加へたならば四尺三寸二分となる。それであるから三寸六分角の柱材を兩軌條の外側に接着して布置し、其の上部に六尺長の厚板を敷いたなら、歩兵の二列縦隊を通過し得るのである。三寸六分角の柱材は得られないであらうから、四寸角を用ふれば宜い、而して厚板と軌條との隙きは敢て顧慮するに足らないであらう。抑も加古川の鐵道橋は長さ四百米即ち千三百三十二尺である。であるから長さ十五尺の四寸角材ならば百七十八本、十二尺長なれば二百二十二本、厚一寸幅六寸の松板二千二百二十枚之に若干の豫備を加へ尙ほ是等木材を固定すべき材料とを左岸の橋礎附近に集積して置かば、要する場合に直に之が設備を施し得るのである。

架橋作業
開始時刻
に就て

架橋作業は固より夜間に於てせなければならん。併し架橋後直に夜戦を

交ふるの利益でない。拂曉時に展開を終るやうにするのが宜い。現時の日出は正さに六時である。概して日出一時間前には既に物色を視分け得るのである。であるから午前五時に渡河し終るやうに規定すれば宜い。凡ろ縦列材料を以てする架橋に於て一橋節の架設に要する時間は、流速一米内外なれば晝間に於て約六分、夜間なれば約八分、流速一米五十乃至二米なれば晝間に於て約八分、夜間に於て約十分を要するのである。橋礎の構築は土地の形狀に於て異なるは勿論であるけれども大約一時間と豫算すれば宜い。て、百米内外の河川に架橋する爲には約四時間を要するのである。應用材料に在りては、豫め橋脚を構造して置いて、之が設置に多くの時間を費すであらう。で四時間半乃至五時間を當てなければならんであらう。それであるから架橋には午後十一時を以て開始せねばならん。城山方面は早く完成するであらう。併し此の方面は戦術上

主力の方面より早きを要するのであるから、矢張り午後十一時に開始するのが宜いのである。

漕渡用の三節舟に積載し得べき歩兵は約十名である。之に漕手二名乃至三名を要するのである。又百米内外の河幅であつて流速二米以下であつたなら乗船上陸を合して夜間なれば一往復の爲概ね十五分を要するのである。であるから歩兵一大隊の掩護隊を漕渡に依りて渡す爲に三節舟二十隻を準備しても約一時間と十五分を要するのである。て、掩護隊は架橋開始の約一時間前から渡河を開始せねばならん。砲兵材料及馬匹は門橋に依らなければならん、さうして三節門橋では、歩兵ならば三十二人、騎兵ならば五人又は砲一門人員六、馬二、或は駄馬四、人員四を積載し得るのである。抑も敵の守備せる河川を渡船に依りて掩護隊を渡さんとするは固より容易の業でない。晝間ならば地形の利に依り、優勢なる火力を

掩護隊の
渡河に就

以て制壓し、其勢に乗じて渡河し得るも、夜間は一に隱密に渡河することとを主とせねばならぬ。之が爲には敵の監視區域外若は其の監視の嚴ならざる地點を選ばなければならん。とは謂へ敵も全般の監視を怠らないであらうから、何れから渡河せんとしても全く偵知せられないことは、望むべからざる事である。であるから成るべく數箇處に於て渡河し、縦令へ敵の偵知する所となつても、何れが眞の渡河點であるかを判定し得ざらしめ、其の迷惑躊躇して斷然たる處置を爲さざるの間に渡河を結了するやうに實施せねばならぬのである。て、極めて靜肅に動作することは勿論又極めて機敏でなければならぬ。

偕て架橋を掩護すると渡河を掩護するとは固より其の意味を異にして居る。蓋架橋の掩護ならば架橋點に於ける作業を敵から妨害せられないやうにすれば足るのである。であるから架橋點から甚しく離隔するの必要

架橋掩護
陣地と渡
河掩護と
地とに就

は無い。殊に夜間に在りては砲彈の危害を受くる虞れ鮮く。又既に述べた通り漕渡に依つて渡河せしむるには多くの時間を要するのであるから架橋前に渡し得る兵力は實際少數に過ぎない。随つて遠く前進して廣き正面の陣地を占領することは不可能である。又遠く前進して爲に優勢なる敵から包圍せられて全滅するが如きことあらば架橋掩護の目的をも達し得られぬのである。それであるから架橋點の近くを選ぶのが宜い。之に反して渡河掩護の爲の陣地は軍橋を確實に保護するは勿論、渡河せる軍隊に運動の自由を與へんければならん。随つて架橋點から遠く離れなければならん。又廣き正面をも占領せんければならん。さうして兵力も架橋掩護に比して強大でなければならぬであらう。で、架橋掩護の爲には歩兵一大隊が最大限であらう。さうして架橋完成期に近づき最早渡河の爲の掩護を要するに至りし際之に相當する兵力を以て所望の陣地を

欠

欠

路の構築及材料の運搬は工兵將校の指導の下に最も靜肅に着々實施されて居る。午後七時に至りて應用材料の橋脚の組立は豫定の員數を完了したので、最早運搬に着手して居る。

此時旅團長は水足に在りて騎兵隊長から次ぎの要旨の報告を受領した。

- 一、敵ノ騎兵ハ大門及野村ノ對岸ヲ堅固ニ守備シアリ其兵力合シテ約三中隊尙ホ其下流處々ニ監視兵ノ出沒スルヲ見ル
- 二、騎兵隊ハ目下主力ヲ以テ澤部ニ在リ本夜暗ニ乘シ敵ヲ突破シテ加古川右岸ノ地區ニ進出セントス
- 三、野村ヨリ下流何レモ徒涉場ナシ

午後八時に至りて道路の構築、其の他材料の運搬を完了した。又架橋縦列も既に其の材料の一半を中西條の西北乾田に他を中津と西河原の西南側とに整頓した。旅團長は水足に在りて是等の諸報告を電話にて聽き取

つたのである。

午後九時三十分に至り、對岸の情況に就て知り得たる所は左の通りである。

一、南條に居つた敵は二三の斥候を残して退却した模様である。都染には若干の部隊が居るやうである、其の東南方林縁には時々斥候が出没して居る

藥栗南方の林縁にも常に斥候が出没して居る

下西條より養老に通ずる渡船場の對岸の堤防には午後六時以來歩兵一中隊許占領して居るやうである

二、上部、池尻、平山、及東には依然監視部隊あり。又出河原の東南端及船頭附近にも一小隊乃至一中隊の監視部隊が居る

此の夜天氣快晴であつて、物色を明視する程の月光無きも星光に依りて

部隊の行動は勿論、諸種の作業に鮮からざる便を與へられて居る。

午後十時に至り漕渡用三節舟は計畫の通り各所に準備せられた。城山方面に在りては對岸の森林及其の附近に於ける斥候の出没が頻繁となつたやうである。

問題

城山方面ニ於ケル掩護隊長ハ現在ノ情況ニ際シテ渡河開始ニ先ダチ何事カ處置スル所アルヤ

答 解

敵の監視が嚴重になつて來たやうであるから、或は渡河し得るの見込が無いと云ひ又有ると云ふも皆是各人の一の感覺に過ぎないのである。斷

答解に就
ての説明
並處置

行すれば案外容易に出来るかも知れん。併し等しく斷行するにしても、不用意にすると、注意深く實行するのとは自らそこに差別が生ずるのである。此の場合に何事も處置すること無く渡河しても、或は甚しき妨害を受けなくて着陸し得るかも知れん。併し得たとしても直に敵の發見する所となつて驅逐せらるるに至るかも知れのである。て、敵の注意を他方に牽いて、何れに纏まつた部隊を持つて行くかを躊躇せしむるやうにすることを勉めねばならん。城山の小隊をして射撃せしむるのは却て敵の注意を眞渡の方面に牽くのである。差當り國包の部隊をして左岸から射撃せしめ同時に其の稍々下流に於て板等を使用して恰も渡河を企つる如く装はしむるのが宜い。又一部隊を下西條から養老に通ずる渡船場の左岸に出して對岸の敵に向つて射撃せしめて此の方面に於ける敵を牽制し置くのが有利であらう。

城山方面の情況

午後十時十分掩護隊長は電話に依りて右の處置を國包の第三中隊長に命令した。同時に第四中隊の一小隊を養老渡船場の左岸に出した。又第一中隊(一小隊缺)は上流渡河點に第二中隊は下流渡河點に集合して夫々乗船を準備して居る。

午後十時二十分國包の部隊は東條に向つて射撃を開始した。同時に其の下流に木材の運搬を始めた。暫時の間は敵から應射しなかつた。が、間もなく點々射弾が飛び來るやうになつた。五分の後には最早七八十の銃數にて應射する有様に至つた。養老渡船場の部隊も今や到着して射撃を開始した其の對岸からは盛に應射するのである。

午後十時三十分上流から三節舟五隻、下流からも同數漕ぎ出さんとせし

に。忽ち對岸の河積中に三四名の敵兵顯れて急劇なる射撃を爲した。間もなく林縁から約二十名許の敵兵來りて上流の部隊に向ひ盛に射撃を始めた。で、中洲に散開して居る我一部隊は之に射撃を指向した。彼我の戦鬪は頗る猛烈である。にも拘はらず渡河の部隊は一齊に漕ぎ出した。けれども敵弾によりて負傷者數名を生じたる爲多少騷擾して居る。下流の渡河部隊は上流程の困難も無く約八分の後對岸に着いた。上陸後直に散開して敵に射撃を指向した。我銃數は固より敵に優るのである。一二分の後突撃した。敵は遂に耐へ得ずして北方に退走した。我部隊は之を追て森林の西北端に達した。此の部隊は第二中隊長の率ゆる五十名の兵員である。此の時恰も藥栗から敵の歩兵約二小隊我前方の堤防に達した。茲に彼我射撃を交換するに至つた。瞬時の間に大に制壓されて今や敵から吹き飛ばされる有様である。此の時恰も上流から渡河した第二中隊長

の率ゆる五十名の部隊が森林を通過して敵の左翼の鼻前に出た。敵は大に狼狽の有様を呈して終に小野の方面に退走した。時に午後十時四十五分であつた。

中津方面の情況

是より先き掩護隊の最先頭に渡河すべき第六中隊の一將校は勇悍にして且游泳に長ぜる下士一、兵卒二、を選抜し裝具を脱せしめ、之を率い徒渉して對岸に到り、東、附近を偵察して午後十時五分に歸來した。其の報告する所に依り掩護隊長は次ぎの事を知つた。

- 一、敵の歩兵部隊は、東、の東端から堤道に沿ふて獨立標高一〇五、四高地の脚に亘りて占領し歩哨を其の南方堤防に配置して居る。
- 二、東と出河原の中央と思はるる部分の堤道にも約歩兵一小隊位の

部隊が占領して居るやうである。

三、池尻及平山にも一部隊が居る、けれども何れも僅少のものに過ぎないやうである。

問題

掩護隊長ハ右ノ情況ニ對シ何事カ處置スル所アルヤ。

答 解

先づ第一に、東、の敵を驅逐せねばならんことは言ふまでも無い。併し之を驅逐するのに、中津北方の渡河點から渡る部隊を逐次に展開して、正面から向ふばかりでは容易に目的を達し得られない。何ぜなれば敵は中津方面に對して十分に準備して居るからである。とは謂へ渡河點を變へる

答解に就
ての説明

ことは掩護隊長の獨斷に委せらるべきものでない。のみならず掩護隊の大部分を渡すべき場處は他に求め得られないのである。て、是非共此處で渡河せねばならん。鐵道橋附近にしても敵の妨害を免れることは出來無い。矢張り中津方面と同様であるに相違無いであらう。であるが等しく計畫の通り渡河するとしても、東、附近の敵をして其の注意を他の方面に牽かしむることが必要である。池尻及平山に居る部隊の兵力は固より確知したのでは無からうから、それが果して僅少であるか否やは分らん。けれども若しも僅少であつて、速に驅逐し得たならば、東、附近の敵に與ふる影響は決して鮮く無いのである。であるから一部隊を平山方面に出すことは、取りも直さず東、附近の敵の注意を牽くのであつて、單に正面にのみ力を用ひしめないものである。偕て一部隊を平山方面に出すに就ては田圃條の渡船場附近から渡河せねばならん。然るに此處には漕渡用鐵

舟を準備して無い。併し幸にも中津東北方の渡河點からは左岸の堤防に接して支流が通じて居る、此の支流に由りて引き上げたならば敵に悟とられないで持行き得るであらう。流勢も甚しく強いのも無し、又距離も千米に過ぎないのであるから左程の時間を要せないのであらう。又員數は五隻位が適當であらう、多くすれば渡河開始を後くらす虞があると中津方面からの渡河甚しく遅延するに至るの不利がある。偕て又平山方面に向ふに就ては上部方面を騒がすことが必要であらう、而して此の方面は容易に騒がし得るのである、即ち一部隊を其の對岸河濱に出して射撃せしむれば宜いのである。で、掩護隊長は次ぎの如く處置するであらう。

- 一、日岡山ヲ占領シアル歩兵中隊ノ一部ヲシテ直ニ出發シ上部ノ對岸ニ到リ同地及池尻ノ敵ヲ射撃シ第六中隊ノ渡河及其前進ヲ援助セシム

掩護隊長
の爲すべ
き處置

- 二、中津ニ在ル歩兵第六中隊ヲシテ直ニ出發シ田圃場ノ渡船場附近ヨリ渡河シ平山ノ敵ヲ撃退シ要スレハ更ニ東、附近ニ於ケル敵ノ左翼ニ向ヒテ壓迫セシム

- 三、工兵隊長ヲシテ中津東北方合流點附近ニ在ル漕渡用鐵舟五隻ヲ成ルヘク速ニ田圃條渡船場附近ニ廻シ第六中隊ノ渡河ニ任セシム
廻漕ニ就テハ一舟ニ歩兵三人ヲ充テ漕手ト相待テ陸地ヨリ引キ上ケシム

情 況

中津方面に於ける掩護隊長の爲さんとする處置は直に各隊長に命令された。日岡山に在る中隊長は其の一小隊を上部の對岸に出した。此の小隊は靜肅に行進し、何の故障も無く上部の對岸に着して上部及池尻に向つ

て射撃を開始した。時に午後十時二十五分であつた。上部からは直に應射した。間もなく池尻方面からも應射するに至つた。而かも對岸近くに進出し來つたやうである。兩方面の銃數は凡そ七八十と思はるるのである。

午後十時三十分五隻の鐵舟は田圃條渡船場に着いた。此處に待つて居つた第六中隊は其の第一回部隊を乗せて漕ぎ出した。何の妨害も無く約八分の後着陸した。中隊長は直に之を引率して最も靜肅に平山東南方堤防を占領した。此の時、東、方面に在りて點々銃聲が起つた、けれども部隊の射撃ではなかりさうである、前方の哨兵が我渡河中の部隊に射撃して居ると思はれた。

問題

第六中隊長ノ決心

答 解

今直に平山に向つて攻撃するのは適當で無い。僅に五十人しか纏まつて居らぬのである。斯かる寡少の兵力を以て攻撃したとて徒らに兵員を傷めるばかりである。東、方面の戦況が進捗して居る状態ならば固より兵力の多寡を問ふの違無く攻撃せねばならん、けれども今は中津方面に於て漸く第一回の部隊が着陸したに過ぎないのである。敵から發見せられた有様でも無い。幸に當面の敵は我れに氣が着か無いのである。で、少くも第二回の渡河部隊が着するまで待つのが宜い。餘り急がば失策の基となるのである。

答解に就
ての説明
並に中隊長
の決心

情 況

午後十時五十七分第二回の渡河部隊が到着した。同時に、東、方面では銃聲が多くなつた。そこで第六中隊長は到着しある部隊を擧げて平山に向ひ射撃して間も無く前進を起した。敵も盛に射撃するのであるけれども銃数は凡そ五六十に過ぎないやうである。更に進んで森林の線の以北に出た。恰も、東、方面から甚しく縦射を受けて餘儀無く伏臥せしめられた。此の時、東、方面では彼我互に火戦を交へて居る我先着隊は、東、の南方の堤防に達して居るやうであつた。午後十一時十分第三回渡河部隊が到着した。茲に全隊の志氣を恢復して突撃に移つた。平山南方の小流を越へるまでは敵の射撃を受けたのであるが尙ほ銳意突進した。平山に乗込んだ際には最早敵は居なかつた。で、中隊長は斥候を長池の兩方面及池尻方面に出して主力を平山部落の南端に集めた。時に、東、方面では彼

私の銃聲が頗る盛である。中隊長は第四回の渡河部隊に、平山に來りて北方及池尻方面を警戒すべきことを命じて置いて、茲に現在せる部隊を以て、東、に向つて前進した。間も無く中津方面の我部隊は突撃した。そこで第六中隊も亦突撃した。東附近の敵は舛田方向に退却した。茲に我部隊は東を占領した。時に午後十一時三十分であつた。

鐵道橋附近の情況

鐵道橋附近では三節舟五隻に依り午後十時三十分第一回の渡河を始めた。忽ち右岸の橋脚に匿れて居つた敵の監視兵が五六名顯れて我れに射撃を向けた。加古川町の部隊から左岸の堤防に配置してありし部隊殊に鐵道橋上に在りし我斥候から射撃したので敵の監視兵は退却した、けれども前方の堤道から猛烈に射弾が飛び來るのである、渡河部隊は動もすれば

騷擾せんとする状態である。が、橋脚を利用して敵弾を避けつつ兎に角着陸して河積に出て橋脚に掩蔽されて後續部隊を待つて居ることになつたのである。後續部隊の渡河も敵弾の爲苦しめられ、豫定時間の通り進捗しないのである。

城山方面の情況

午後十時四十五分薬栗南方の堤防に在りし敵は小野方向に退却した。で第二中隊長は直に斥候を出して追躡せしめた。又第一中隊長は斥候を薬栗に出した。退却した敵は小野に停止したやうである、又薬栗にも若干の部隊が居つて我斥候を阻止した。此の時既に南條方面は森々として銃聲を聞かないのである。間も無く兩中隊長は斥候の報告に依りて薬栗及小野の敵は谷口に退却したことを知つた。

午後十時五十分過、兩中隊長は平山と思はるる方向に劇しき銃聲の起つたのを聞いた。間も無く第二回の渡河部隊が相前後して到着した。此の部隊と共に來りし將校の報告に依りて、中津方面の掩護隊が一部を上部の對岸に出し、又一部が田圃條の渡船場附近から渡河して、平山の敵を攻撃しつつあることを知つた。時に各方面に出でし斥候から報告があつた。其の要旨は次ぎの通りである。

退却セシ敵兵ハ谷口ノ東端ヨリ南端ニ亘リテ構築シアル散兵壕ヲ占領シアリ又谷口ノ南方ニモ城山ニ面シテ歩兵約一小隊工事ニ據レリ
養老南方ノ堤防ニハ依然敵兵アリテ對岸ノ我兵ト對戦シアリ

午後十一時十分乃至十五分に第三回渡河部隊が大隊長と共に到着した。で、兩中隊長は各々情況を報告した。

問題

此時ニ於ケル大隊長ノ決心

答 解

谷口に向つて攻撃するが如きは固より適當でない。之を撃退せねば架橋作業を掩護することが出来ないと謂ふので無い。而かも陣地を占領して居る敵を僅か三百人位の兵力を以て攻撃したとて奏功は覺束無い。のみならず敵から逆襲を受けて敗退するに至らば架橋の掩護が覺束無い。それであるから差當り確實に陣地を占領せねばならん。とは謂へ小野に多くの兵力を出すは不必要である。又藥栗南方の森林の線を占領するのも適當で無い。此の線は餘り架橋點に接近して居るから若しも敵が前方に來つたならば其の彈丸が作業者の頭上に落つるの不利がある。で、小野

答解に就
ての説明

の西端と齊頭線上の堤防から養老方面に面して西南に亘る線を占領するのが最も適當して居る。さうして將校の指揮する半小隊位を小野の西端に出して、同地を占領し西方及北方に對して我右側を警戒せしめねばならん。又各隊は直に工事を施さねばならん。斯くして逐次渡河し來る部隊を増加せば縦令へ敵の猛烈なる攻撃を受けても靱強に抵抗し得るであらう。

決 心

一部ヲ以テ小野西端ヲ他ヲ以テ小野南方堤防ヨリ西南ニ亘ル線ヲ占領シテ架橋作業ヲ掩護セントス

大隊長の
決心及處
置

處 置

河川之戦闘 前編

- 一、第二中隊ヨリ將校ノ指揮スル半小隊ヲ小野西端ニ出シ同地ヲ占領シ西方及北方ニ對シ我右側ヲ警戒セシム
- 二、第二中隊(半小隊缺)ヲシテ谷口及養老ニ對シテ小野西端ト略ク齊頭線上ノ堤防ヨリ西南ニ亘リ約百五十米間ヲ占領セシム
- 三、第一中隊(一小隊缺)ヲシテ養老及其南方堤防ニ對シテ第二中隊ノ左翼ト河川トノ中間約百五十米ノ線ヲ占領セシム

情 況

右の處置は大隊長から直に兩中隊長に命令された。兩中隊長は豫め晝間に於て左岸から此の附近の地形を研究して居つたので、大隊長の意圖の如く其の隊を配置し得た。さうして四日午前十二時三十分に至り兩中隊共工事を終つた。此の時第四中隊(一小隊缺)も渡河を畢り第一線の中央

後に在りて豫備となつた。是より先き右翼隊長は渡河せし部隊が陣地を占領せしことを知り、騎兵小隊を國包に出して第三中隊と交代せしめ、第三中隊を下西條に招致して第一大隊長の指揮に復した。此の中隊は既に下西條に到着して今や渡河を始めたのである。又右翼隊長は衛生隊擔架中隊の二分隊と衛生員若干名に必要な材料を携持せしめ第三中隊と共に渡河することを命じた。

架橋作業は豫定の通り開始した。但し左岸に於ける橋礎は既に架橋開始前に完成して居つたのである。今や作業は着々進捗しつつある。

午前一時、敵の歩兵約一大隊我掩護隊に向つて攻撃して來た。我第一線は直に射撃を開始した。けれども敵の攻撃は頗る猛烈である瞬時の間に百米内外に接近した。茲に彼我の射撃は最も熾盛となつた。草地の方面は兎に角敵の前進を阻止した、けれども小野の方面は非常の苦戦である、

て、大隊長は第四中隊（一小隊缺）を取敢へず第二中隊の右翼に展開して之に當らしめた。が、此の中隊の散開せし時には既に敵が小野の南端から東端に亘りて到着して居る。小野に居つた我部隊は藥栗に押込められた。けれども新銳なる第四中隊の射撃にて漸く敵の前進を止めた。併し何れも非常の苦戦である。今や大隊長の手下には第三中隊の約半部到着しあるのみ、他は渡河中である。敵の射撃は愈々猛烈である。我部隊は殆ど制壓されて氣力も餘程衰へた模様である。大隊長は己を得ず手下に在る第三中隊の半部を第一、第二中隊の中間に展開すべきことを命じた時に我第一中隊の左翼から機關銃の勇ましき音響が起つた。我部隊は之に勵まされて更に振起した。さしも優勢なる敵も此の不意なる機關銃の縦射には狼狽せず居られなかつたであらう、此の瞬時に於て形勢一變し敵線に動搖を來したのである。時に第三中隊の半部も第一と第二中隊

との中間に散開して射撃を開始した。我部隊は愈々志氣を恢復した。間もなく第三中隊の殘餘は殆ど到着した。敵は終に耐へ得ずして彼此の處から退走し始めた。時に午前一時三十分であつた。第一中隊の左翼に出た機關銃は一小隊である。是より先き銃隊長は左岸に在りて渡河の順序を待つて居つた。時に對岸に於ける銃聲を聞いて戦況啻ならずと察したので、第三中隊の將校と協議して取敢ず一小隊を率て渡河し、直に河岸に沿ふて第一中隊の左翼前に出で射撃を開始したのであつた。

問題

此時ニ於ケル大隊長ノ決心

答 解